# 「原爆の絵」にみる被爆の記憶

**直野　章子**（なおの　あきこ）

**京都大学人文科学研究所　准教授**

1994　B.A., School of International Service, American University（Washington, D.C.）
1995　Project Director, Nuclear History Institute, American University
（広島市との共催で原爆展を開催）
1998　M.A., Department of Sociology, University of California, Santa Cruz
2002　Ph.D., Department of Sociology, University of California, Santa Cruz
2003　日本学術振興会特別研究員（PD）
2005　九州大学大学院比較社会文化研究院　准教授
2016　広島市立大学広島平和研究所　教授
2020　現職

主な著書
『ヒロシマ・アメリカ』（渓水社、1997、第三回平和共同ジャーナリスト基金奨励賞）
『「原爆の絵」と出会う』（岩波書店、2004）
*Beyond the Frame*（共著、Palgrave Press、2005）
*Traces in the Social World*（共著、*University of Minnesota Press*、*2010*）
『被ばくと補償 ── 広島、長崎、そして福島』（平凡社、2011）
『原爆体験と戦後日本 ── 記憶の形成と継承』（岩波書店、2015）など

## Ⅰ．はじめに

1974 年 5 月、1 枚の絵を携えた男性が NHK 広島放送局を訪ねた。原爆投下直後に萬代橋でみた光景を描いた小林岩吉さんである。小林さんの絵にヒントを得て、NHK は「市民の手で原爆の絵を残そう」と呼びかけた。74 年と 75 年の 2 年間で集まった絵は 2,225 枚に上る[1]。それから 30 年近く後に、再び NHK や広島市が被爆体験の絵を募集した結果、1,411 枚の絵が届けられた[2]。

本稿では、こうして 2 度にわたって集められた「市民が描いた原爆の絵」（以下「原爆の絵」）の比較を通してみえてくる被爆の記憶の特徴について考察することを目的とする。その際、人文社会学の記憶研究における理論的枠組みを採用する。

記憶とは過去に関わることであるが、想起する現在における過去の表象やそれに伴う情動・感情でもある。被爆のように強烈な体験の記憶であったとしても、その後、社会集団の中で形成される集合的記憶（出来事の一般化されたイメージや表象、あるいは記憶の枠組み）によって、体験者の記憶は影響を受けるのである。外在性と拘束性を持つ「社会的事実」としての集合的記憶が存在するという

[1] NHK 広島放送局 60 年史編集委員会編『NHK 広島放送局 60 年史』NHK 広島放送局、1988 年、249-256 頁。
[2] 広島平和記念資料館編『図録 原爆の絵 ── ヒロシマを伝える』岩波書店、2007 年、5 頁。『図録』には 1,338 枚とあるが、資料館の「平和データベース」では 1,411 点となっている。

理論的立場をとるならば、純粋な個人的記憶は成立しないということになる。つまり、現在という枠組みから完全に自由な「過去そのもの」はありえないということである。本稿では、こうした理論的立場をとりながら、被爆体験そのものに迫るのではなく、体験の記憶の形成と変容について「原爆の絵」を手掛かりに考察する。

本研究で分析の対象とするのは、1974 年と 75 年に NHK の呼びかけにより集まった「原爆の絵」2,225 点のうち、広島平和記念資料館（原爆資料館）の「平和データベース」で公開されている 665 人の作者による 1,988 点の絵（以下、原爆資料館の表記に倣って「旧原爆の絵」もしくは GE コードで表記）、そして、2002 年に広島市、NHK などの呼びかけに応じた 473 人の作者による 1,411 点の絵（以下、「新原爆の絵」もしくは NG コードで表記）である [3]。

## Ⅱ．方法

### 1　描かれた場面の多寡

「平和データベース」にある分類軸のなかで「被害の状況」と「救援・復旧」のうち、以下に挙げたサブカテゴリーに該当する絵の数と全体に占める割合を「旧原爆の絵」と「新原爆の絵」でそれぞれ算出して比較する。この分析では、どのような場面が、どの程度描かれているのかを比較する。

「被害の状況」と「救援・復旧」それぞれについて、調査対象としたサブカテゴリーは以下の通りである。

被害の状況：原爆投下の瞬間、きのこ雲（キノコ雲、原子雲）、熱線、爆風（衝撃波）、黒い雨、動員学徒・挺身隊、爆心地付近、やけど、負傷者、母と子・妊婦、外国人・米軍捕虜、倒壊した家屋の下敷きになる、助けを求める、水を求める、焼け跡の死体、防火用水の死体、川の中の死体

救援・復旧：負傷者を運ぶ、治療する、看病する、水を与える、死体を集める・火葬する・埋葬する、家族を捜す・知人友人を捜す、遺骨、救護所・病院・収容所・避難所、救援隊・救護班・警防団・医師・看護婦

### 2　同じ場面や場所、対象の描き方の同異

#### 2-1　女学生

同じ場面や対象の比較として、まずは「女学生」を取り上げる。「平和データベース」で「女学生」というキーワード検索をした結果、「旧原爆の絵」では 35 点、「新原爆の絵」では 36 点の計 71 点が該当した。ただし、説明文や添えられた手紙にある言葉をもとにした分類であるために、必ずしも描かれた場面の分類と同一ではない。「旧原爆の絵」のうち、1 点は説明文であるために絵と合わせて 1 点とカウントして計 34 点とした。よって、計 70 点を分析対象とする。

[3] 作者の人数については、広島平和記念資料館学芸課の土肥幸美さんにご教示いただいた。

### 2-2　火傷の描写

「女学生」の分析結果から、「旧原爆の絵」と「新原爆の絵」で、火傷の状態の描き方に違いがあるという仮説をえた。そこで、より多くの絵を対象として分析するために、「火傷」を描いた絵の比較を行うことにする。

「女学生」の場合と同様に、「平和データベース」で「火傷」というキーワード検索をした結果、「旧原爆の絵」では 190 点、「新原爆の絵」では 165 点の計 355 点が該当した。そのうち、「旧原爆の絵」から説明文だけの 1 点を除き、「旧原爆の絵」189 点、「新原爆の絵」165 点の計 354 点を分析対象とした。

### 2-3　きのこ雲

きのこ雲は、同心円状の地図と並んで、原爆の代表的な一般化されたイメージ（集合的記憶）だといえる。そこで、集合的記憶の形成と変容という観点から、「原爆の絵」におけるきのこ雲の表象を分析することが重要であると考えた。

うえでみたように「平和データベース」の「被害の状況」のなかには「きのこ雲（キノコ雲、原子雲）」の分類がある。それに該当するのは、「旧原爆の絵」が 93 点、「新原爆の絵」が 114 点の計 207 点であった。そのうち、きのこ雲が描かれていないもの（文章中に言及しているのみで、描かれた場面はほかのものなど）を除外し、「旧原爆の絵」88 点、「新原爆の絵」109 点の計 197 点を分析対象とした。

### 3　同一作者による絵の比較

「平和データベース」の情報をもとに、「旧原爆の絵」と「新原爆の絵」両方に絵を描いた作者を調査したところ、該当したのは 24 人であった。それらの作者が描いた絵は、計 180 点である。該当する作者一覧は表 1 の通りである[4]。

**表 1：同一作者**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 小尻　勉 | 近藤　幸子 | 中津　久子 | 西村八千代 |
| 原田みどり | 森岡まさ子 | 後藤　利文 | 高橋　正明 |
| 坂井　武彦 | 山田須磨子 | 松本　政夫 | 池庄司（久保）トミ子 |
| 柴田フミ子 | 高野　信政 | 松井　妙子 | 高原　良雄 |
| 金行　清香 | 中田　輝子 | 玉田吉之助 | 中本　秀子 |
| 内田　栄一 | 辰岩　秀子 | 塚本　四一 | 杉本知佐子 |

## III．結果

### 1　描かれた場面の多寡

結果は表 2 の通りである。「被害の状況」のなかでは「きのこ雲」と「熱線」

[4]「平和データベース」の情報からは、池亀春男さんと三浦静子さんも「旧原爆の絵」と「新原爆の絵」に絵を提供したことになっている。しかし、池亀さんの場合は、本人が亡くなった後に遺族から絵が寄贈されたのだが、絵を描いた時期は 2002 年よりもかなり前であろうこと、三浦さんの場合は絵の情報から「新原爆の絵」募集時に描かれたものと判断できないことから、分析の対象から除外した。

**表 2：描かれた場面の比較**

「被害の状況」　（%は「新原爆の絵」「旧原爆の絵」それぞれの総数に対する割合）

| | 原爆投下の瞬間 | | きのこ雲（キノコ雲、原子雲） | | 熱線 | | 爆風（衝撃波） | | 爆心地付近 | | 黒い雨 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| NG | 55 | 3.9% | 114 | 8.1% | 103 | 7.3% | 114 | 8.1% | 6 | 0.4% | 32 | 2.3% |
| GE | 65 | 3.3% | 93 | 4.7% | 56 | 2.8% | 145 | 7.3% | 7 | 0.4% | 57 | 2.9% |

| | 母と子・妊婦 | | 動員学徒・挺身隊 | | やけど | | 負傷者 | | 外国人・米軍捕虜 | | 倒壊した家屋の下敷きになる | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| NG | 111 | 7.9% | 90 | 6.4% | 172 | 12.2% | 308 | 21.8% | 10 | 0.7% | 86 | 6.1% |
| GE | 176 | 8.9% | 106 | 5.3% | 247 | 12.4% | 580 | 29.2% | 19 | 1.0% | 121 | 6.1% |

| | 助けを求める | | 水を求める | | 焼け跡の死体 | | 防火用水の死体 | | 川の中の死体 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| NG | 48 | 3.4% | 100 | 7.1% | 175 | 12.4% | 33 | 2.3% | 114 | 8.1% |
| GE | 72 | 3.6% | 189 | 9.5% | 298 | 15% | 65 | 3.3% | 162 | 8.1% |

「救援・復旧」　（%は「新原爆の絵」「旧原爆の絵」それぞれの総数に対する割合）

| | 負傷者を運ぶ | | 治療する | | 看病する | | 水を与える | | 死体を集める・火葬する・埋葬する | | 家族を捜す・知人友人を捜す | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| NG | 61 | 4.3% | 38 | 2.7% | 42 | 3.0% | 20 | 1.4% | 148 | 10.5% | 101 | 7.2% |
| GE | 97 | 4.9% | 86 | 4.3% | 28 | 1.4% | 41 | 2.1% | 213 | 10.7% | 134 | 6.7% |

| | 遺骨 | | 救護所・病院・収容所・避難所 | | 救援隊・救護班・警防団・医師・看護婦 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| NG | 28 | 2.0% | 96 | 6.8% | 25 | 1.8% |
| GE | 29 | 1.5% | 238 | 12.0% | 60 | 3.0% |

に分類される「新原爆の絵」（8.1%、7.3%）が「旧原爆の絵」（4.7%、2.8%）に比べて、総数に占める割合が高い。このうち「きのこ雲」について、次節で「新原爆の絵」と「旧原爆の絵」の違いについて検討する。

「救援・復旧」のなかでは「治療する」「救護所等」「救援隊等」に分類される「新原爆の絵」（2.7%、6.8%、1.8%）が「旧原爆の絵」（4.3%、12.0%、3.0%）に比べて、総数に占める割合が低い。描き手自身が治療したり救援する主体であったとは限らないが、そうした場面に携わった可能性があるのは、より年長の者であったであろうと推測できる。他方「看病する」については「新原爆の絵」（3.0%）の方が「旧原爆の絵」（1.4%）に比べて総数に占める割合が高いが、「治療する」とは違い、「看病する」は子どもでもその担い手になったり、その場を目撃することができたであろう。つまり、新旧の違いは、「旧原爆の絵」よりも 30 年近く後に描かれた「新原爆の絵」の作者の方が、全体として年齢が低いことによると考えられるのである[5]。

上記の分類においては、多少の違いはみられたものの、描かれた対象や場面については、全体として「旧原爆の絵」と「新原爆の絵」の間に大きな違いがあったとはいえない。どちらとも、負傷者や死体を含む絵が多数を占めているのである。

[5] より詳細で正確な分析を行うには、作者の年齢や被爆地などを踏まえて絵を検討することが求められる。

## 2　描かれた場面

### 2-1　女学生

女学生の負傷者や死者に関して、旧新「原爆の絵」を比較して、いずれがより写実的な筆致で描かれているかを検討した。描写の「生々しさ」の指標として、①カラーで表現しているか否か、②血の色を塗っているか否か、③皮膚の変色や火傷で皮膚が垂れ下がっている状態を表現しているか否か、④髪の毛が逆立っていたり乱れている状態を表現しているか否か、⑤衣服が破れていたり全裸・半裸状態になっている状態を表現しているか否か、⑥手を幽霊のように前にぶら下げているさまを表現しているか否か、を使用する。

**「旧原爆の絵」**

・分析対象とした 34 点のうち、文章では女学生の負傷に言及しながらも、その姿が描かれていない絵が 1 点あった。また、木村貞子さんが描いた絵（GE14-50）については、データベースでは「女学生」とあるが、絵に説明はなく、女学生と特定した根拠が不明であることから、分析の対象からは除外した。
・分析した 32 点のうち、描かれた女学生が負傷（瀕死も含む）した状態であるか、死んだ状態（遺体）であるかを分析した結果、負傷した状態を描いた絵は 21 点（65.6%）、遺体を描いた絵は 12 点（37.5%）であった。（うち 1 点は負傷と遺体の両方が描かれている。）
・カラーで描いた絵は 25 点（78.1%）、白黒で描いた絵は 7 点（21.9%）であった。
・負傷者を描いた 21 点のうち、皮膚が垂れ下がっていたり、逆立った髪、変色した皮膚、破れた衣服など、負傷の状態を写実的に表現していると思われる絵は 12 点（57.1%）であった。しかし、火傷で腫れて変色した顔を描写しながらも髪は乱れていなかったり、血の色や衣服の損傷を描写しながらも脚はきれいなまま描かれていたりと、惨状をありのまま描いたわけではない絵も少なくない。髪は逆立ち、皮膚は垂れ下がり、皮膚は変色して、といった負傷の状態をカラーで描いた絵は、GE02-17、GE03-38、GE16-05 の 3 点（14.3%）にとどまる。
・遺体を描いた 12 点のうち、負傷の状態を比較的リアルに表現したものは、GE03-25 の 1 点（8.3%）のみである。
・負傷者と遺体をあわせて、負傷の状態を生々しく描いた絵は 4 点（12.5%）である。

**「新原爆の絵」**

・分析対象とした 36 点のうち、文章では女学生の負傷に言及しながらもその姿がない絵が 1 点、被爆していない女学生に言及する絵が 4 点、女学生か中学生か判別できない絵が 1 点あり、それらを除いた 30 点を分析対象とした。
・30 点のうち、負傷した状態を描いた絵は 15 点（50%）、遺体を描いた絵は 15 点（50%）であった。遺体を描いた絵のうち、1 点は遺髪のみ、1 点は遺骨のみであるが、亡くなった状態を描いていることから「遺体」に分類した。
・絵の点数からいうと、負傷状態を描いた絵は全体の 50%、遺体を描いた絵は 50%であり、同じ割合である。「旧原爆の絵」とは違う傾向である。ただし、高本正義さんが 10 点の絵で、川に浮かんだ 1 人の女学生の遺体が変化してい

く一連の場面を描いていることを考慮して、作者 21 人が描いた絵という観点から分析すると、負傷状態を描いたのは 71.4%、遺体を描いたのは 28.6%の作者であった。描き手という分析軸でみると、「旧原爆の絵」と同様の傾向であり、負傷者を描いた作者の割合の方が高いといえる。

・カラーで描いた絵は 15 点（50%）、白黒で描いた絵は 15 点（50%）であったが、高本さんの絵を 1 点と数えると、カラーが 15 点（71.4%）、白黒が 6 点（28.6%）となり、「旧原爆の絵」と同じ傾向であるといえる。
・負傷者を描いた 15 点のうち、皮膚が垂れ下がっていたり、逆立った髪、変色した皮膚、破れた衣服など、負傷の状態を写実的に表現していると思われる絵は 10 点（66.7%）であった。「旧原爆の絵」より高い割合である。髪は逆立ち、皮膚は垂れ下がり、皮膚は変色して、といった負傷の状態をカラーで描いた絵は、NG176-13、NE269-01、NG461 の 3 点（20%）にとどまるが、「旧原爆の絵」に比較すると若干高い割合である。
・遺体を描いた 15 点（高本さんの絵を 1 点と数えた場合は 6 点）のうち、負傷の状態をカラーで生々しく表現したものは、NG315-03 の 1 点（16.7%）のみである。これも「旧原爆の絵」と同様の傾向である。ただし、黒鉛筆のみを使って描いた高本さんの一連の絵は、遺体の手首や足首がなくなったり、手足、首がなくなった状態を描いており、ある種の生々しさを感じさせるものといえる。
・負傷者も遺体も、負傷の状態を生々しく描いた絵は 4 点（19%）であり、「旧原爆の絵」と同様の傾向であるが若干割合が高い。

「旧原爆の絵」でも「新原爆の絵」でも、負傷の状態を生々しく描いた作者が少数にとどまったのは、写実的な表現が技術的に難しかったからという理由もあるであろう。筆者が聴き取りをした作者のなかでも、技術があればより正確に描けたのに、という人は少なくなかった。同時に、瀕死の負傷者や死者に対する慰霊の気持ちが、リアルに描かせなかった要因であるかもしれない。たとえば、防火用水のなかで死んだ女学生たちの絵（川口シマ子さん、GE20-10）には、おかっぱ頭の女学生たちが、髪も衣服も乱れのない状態で描かれており、まるで生きているかのようにみえる。若くして亡くなった少女たちに手向けた川口さんの思いが感じられる絵である。

「旧原爆の絵」も「新原爆の絵」も、対象との心的距離が「リアルに」描くことを可能にしたとは必ずしも言えない。「旧原爆の絵」で負傷者や死者の惨状を生々しく描いた作者の 1 人は、描いた対象に対して「哀れ」と感じている[6]。「新原爆の絵」の作者も、絵にした女学生について「夢も希望もあったろうに」と思いを巡らせたり、「合掌」という言葉を添えたりしている。

「新原爆の絵」において火傷の描写が生々しい絵の割合が若干高いことがわかったが、大きな違いではないし、比較した絵の数が少ないために、確たることはい

[6] GE03-25 を描いた岡崎秀彦さんは、筆者による聴きとり調査の際、絵に描いた死んだ女学生について「遺品がいっぱい、いっぱいある中に女の子の、リリアンのついた革の赤い小さい財布なんかがあってね。それを見た時には可哀相でね。あんな財布を持つ子どもが皆ね、こういう風になったんかなあと思うとね」と語っていた。

えない。

## 2-2　火傷

「女学生」での分析結果を受けて「旧原爆の絵」と「新原爆の絵」における火傷の表象を比較した。分析するにあたって、①カラーで描かれているか白黒で描かれているか、②血の色を塗ったり、皮膚の変色を表現しているか否か、③皮膚が垂れ下がったり、めくれたりしている状態を表現しているか否か、④髪の毛が逆立っていたり乱れている状態を表現しているか否か、⑤衣服が破れていたり全裸・半裸状態になっている状態を表現しているか否か、⑥手を幽霊のように前にぶら下げているさまを表現しているか否か、を基準とした。

### 「旧原爆の絵」

・「火傷」のキーワード検索で該当した絵は、前述のとおり 189 点であった。そのうち、火傷をおった人が描かれていない絵（馬など動物の火傷を描いた絵）を除いた 184 点を分析対象とした。
・カラーで描いた絵は 131 点(71.2%)、白黒で描いた絵は 53 点(28.9%)であった。
・血の色・皮膚の変色ありは 89 点（48.4%）である。
・皮膚が垂れ下がっているは 77 点（41.8%）である。
・髪の毛が逆立っていたり乱れているは 75 点（40.8%）である。
・衣服が破れていたり全裸・半裸状態は 132 点（71.7%）である。
・手を幽霊のように前にぶら下げているは 31 点（16.8%）である。
・手を前にぶら下げている状態を描いた 31 点のうち、皮膚が垂れ下がっている状態を表現したのは 21 点（68%）である。つまり、手を前にぶら下げている状態を描いた絵の多くに、垂れ下がった皮膚が描かれていることになる。
・カラーで描かれた絵も衣服の乱れや半裸・全裸状態を描いた絵も 7 割強ある。カラーでかつ、衣服の乱れ等を描いたのは 96 点で、全体の半数以上に上る。
・皮膚が垂れ下がったり、めくれたりしている状態を表現している絵 77 点のうち、55 点（71.4%）がカラーで描かれている。
・6 つの指標すべてに該当する、生々しい表現の絵は 7 点（4%）に留まる。

### 「新原爆の絵」

・「火傷」のキーワード検索で該当した絵は、前述のとおり 165 点であった。そのうち、火傷をおった人が描かれていない絵（馬など動物の火傷を描いた絵、きのこ雲を描いた絵、負傷者を見舞いに来た人など）を除いた 135 点を分析対象とした。
・カラーで描いた絵は 111 点（82.2%）、白黒で描いた絵は 24 点（17.8%）であった。「旧原爆の絵」に比べてカラーの絵の割合が高いといえる。
・血の色・皮膚の変色ありは 78 点（57.8%）である。「旧原爆の絵」と比較して高い割合である。
・皮膚が垂れ下がっているは 50 点（37%）である。「旧原爆の絵」と比較して若干低い割合である。
・髪の毛が逆立っていたり乱れているは 57 点（42.2%）である。「旧原爆の絵」

と比較してほぼ同じ割合である。
・衣服が破れていたり全裸・半裸状態は 101 点（74.8%）である。「旧原爆の絵」と比較してほぼ同じ割合である。
・手を幽霊のように前にぶら下げているは 24 点（17.8%）である。「旧原爆の絵」と比較してほぼ同じ割合である。
・手を前にぶら下げている状態を描いた 24 点のうち、皮膚が垂れ下がっている状態を表現したのは 19 点（79%）である。「旧原爆の絵」と比較して高い割合である。
・カラーで描かれた絵は 8 割を超え、衣服の乱れや半裸・全裸状態を描いた絵も 7 割を超える。カラーでかつ、衣服の乱れ等を描いたのは 87 点で、全体の 6 割を超える。「旧原爆の絵」と比較して高い割合である。
・皮膚が垂れ下がったり、めくれたりしている状態を表現している 50 点のうち、40 点（80%）がカラーで描かれている。「旧原爆の絵」と比較して高い割合である。
・6 つの指標すべてに該当する、生々しい表現の絵は 13 点（10%）に留まるが、「旧原爆の絵」と比較して高い割合である。

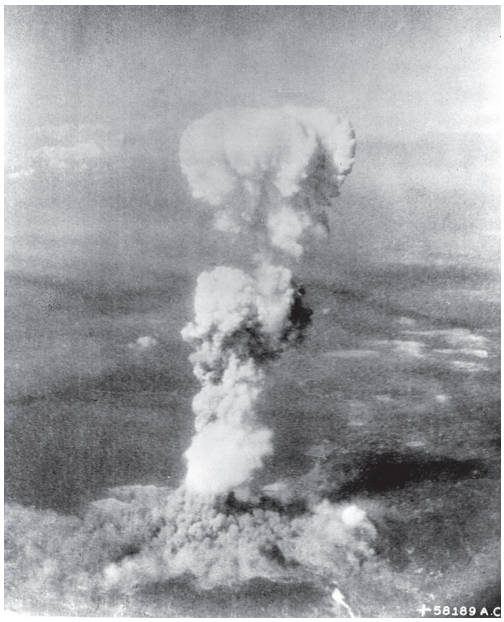
「旧原爆の絵」と「新原爆の絵」を比較して違いがみられるのは、①「新原爆の絵」の方がカラーの絵の割合が高く、②血の色・皮膚の変色ありは「新原爆の絵」の方が総数に占める割合が高いという点、③手を前にぶら下げている状態を描き皮膚が垂れ下がっている状態を表現したもの、④カラーでかつ、衣服の乱れ等を描いたもの、⑤皮膚が垂れ下がったり、めくれたりしている状態をカラーで表現した絵、⑥ 6 つの指標すべてに該当する絵の割合はすべて「新原爆の絵」の方が高いという点である。つまり、火傷を描いた絵に関する限り、「旧原爆の絵」に比べて「新原爆の絵」の方が、全体として生々しい表現だといえるのである。

### 2-3　きのこ雲

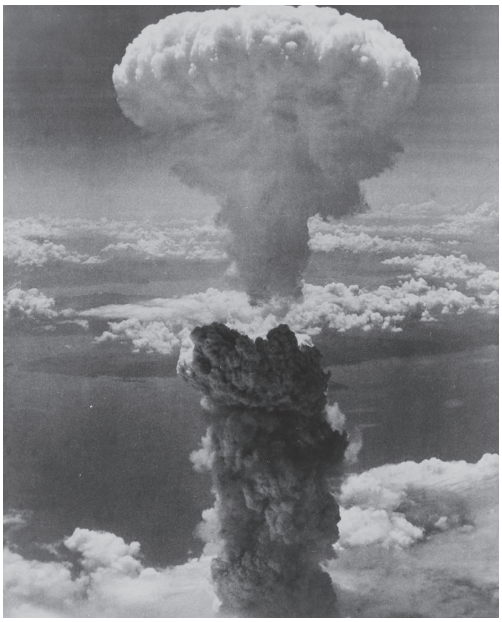
きのこ雲の表象について、集合的記憶という観点から分析するために、絵で表現されている雲の形象に一定の傾向がみられるかどうかに着目する。実際に見えた雲の形は目撃地点によって違いがあり、キノコの形をした雲は、中心部からある程度の距離がなければ見ることはできなかった。そこで、描かれた場所、作者の体験と雲の形象との関係を考慮に入れて、絵にある雲は、実際に作者がその場で目撃したものであるのか、別の場所でみたものなのか、あるいは、実際には目にしていないものなのかを分析する。

**「旧原爆の絵」**

・分析対象とした絵は、資料館が「きのこ雲」に分類した 93 点のうち、実際にきのこ雲が描かれている 88 点である。「旧原爆の絵」全体の 4.4%にあたる。
・県外からみた雲を描いた絵は 1 点（1.1%）である。
・広島ではなく、長崎でみられたきのこ雲の形をしているものは、21 点（23.9%）である。（写真資料 1 参照）
・作者の体験と描かれた雲の形を検討した結果、実際には目にしたはずのない、



広島の原子雲
（米軍撮影、米国国立公文書館提供）



長崎の原子雲
（米軍撮影、Stimson Center 所蔵、広島市立大学橋本健佑氏作成）

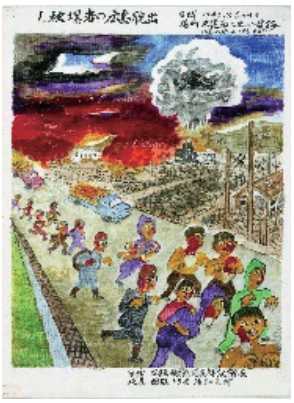
写真資料１

あるいは原爆の象徴としてのきのこ雲を描いていると推測できる絵は 10 点（11.4%）である。以下、うち 5 点を検討する。

GE11-03 と GE11-06 を描いた田中儀作さんは、乗車していた列車が五日市あたりを通ったときに被爆した。五日市からであれば雲は見えたであろうが、絵にあるようなきれいなマッシュルーム型だっただろうか。『原子爆弾災害調査報告書』（1953 年）に掲載された五日市での目撃談によると、原爆炸裂直後に松茸型の白い雲が見えたとある。しかし、絵にあるのは田中さんが己斐駅付近に徒歩で着いた時点の情景であることを考えると、描かれた雲がそこで実際に見たものであるとは考えづらい。また、GE11-06 にあるきのこ雲は、高度 15.7 キロの地点の米軍機から撮影された積乱雲の写真とそっくりであり、己斐と横川駅の間の線路上からみえるはずのない形である。2 枚の絵とも、きのこ雲の下に原爆ドームが描かれていることを併せて考えると、原爆投下の象徴として、きのこ雲を描いたのだろうと推測される。

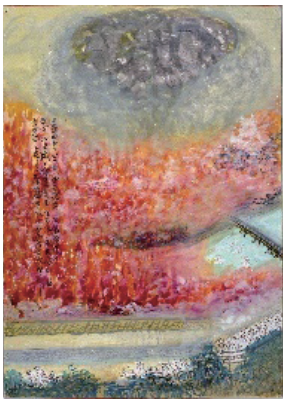
GE14-02 を描いた喜代吉五郎さんは、二葉山から目にした、火の海となった市内の情景を描いた。しかし、二葉山の高度と爆心地からの距離を考えると、絵にあるような、きれいなマッシュルームの形をした雲を実際にみたと考えるには無理がある。『原子爆弾災害調査報告書』の二葉山での目撃証言には、入道雲のような雲であったとある。絵にあるきのこ型の雲は、原爆のシンボルとして描かれたものかもしれないし、喜代さん自身の記憶に残る雲の形が、集合的記憶によって作り変えられた結果なのかもしれない。

GE16-23 を描いた中川謙さんは、坂町鯛尾で閃光を目撃し、その後、暁部隊船舶中隊の隊員として負傷者の救援にあたった。絵には「爆死の瞬間を語り母親の元でつきた学徒の死」とある。実際に中川さんがその様子を目撃したわけではなく、家にたどり着いた女学生の話をもとに絵を描いたそうである。背景に描かれたきのこ雲は、鯛尾で目にしたものらしいが、少なくともこの絵においては、原

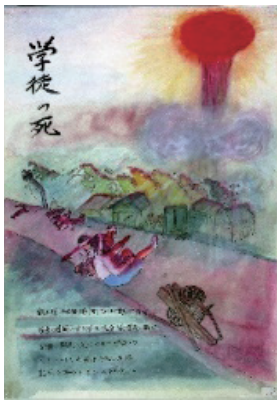


GE11-03

GE11-06

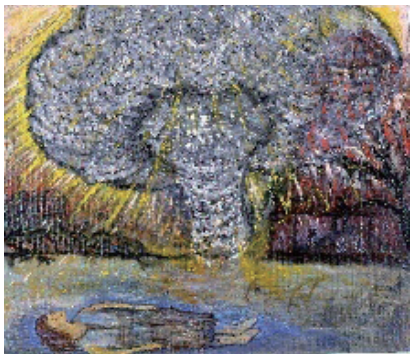


GE14-02




GE16-23

GE19-12



NG118

NG149-01

NG183-40

爆の象徴として描かれたものだろう。

GE19-12 を描いた瀬島唯男さんは、呉市から「西の空を見るときのこのような入道雲」を見たという[7]。絵は 8 月 7 日に東白島町で目撃した情景である。全焼の電車と電車の中の黒焦げ死体が描かれており、その背景にきのこ雲がある。しかし、死体と雲を同時に見たはずはないことから、呉で見た雲と入市後に見た死体という複数の光景を 1 枚の絵にしたものではないかと思われる。実際に呉から見えた雲であるとしても、長崎型に近いその形からして、集合的記憶が瀬島さん

[7] NHK 中国本部『被爆体験　私の訴えたいこと（上）』NHK 中国本部、1977 年。

自身の記憶となった結果、描かれた、あるいは、原爆の象徴として描いた絵だと解釈できる。

**「新原爆の絵」**

・分析対象とした絵は、資料館が「きのこ雲」に分類した 114 点のうち、実際にきのこ雲が描かれている 109 点である。「新原爆の絵」全体の 7.7%にあたる。「旧原爆の絵」に比べると全体に占める割合が高い。
・県外からみたきのこ雲を描いた絵は 5 点（4.6%）である。「旧原爆の絵」より高い割合である。
・広島ではなく、長崎でみられたきのこ雲の形をしているものは、41 点（37.6%）に上る。「旧原爆の絵」より高い割合である。
・作者の体験と描かれた雲の形を検討した結果、実際には目にしたはずのない、あるいは原爆の象徴としてのきのこ雲を描いていると推測できる絵は 10 点（9.2%）であり、「旧原爆の絵」とほぼ同じ割合である。以下、3 点を検討する。

NG118 には、大きなきのこ雲とその下に横たわる若い女性の姿がある。作者の奥井裕子さんと同じ場所で被爆して、2 日後に亡くなったという妹である。衣服が破れていなければ眠っているようにみえるのは、妹が被爆した姿を絵にすることができなかったためではないだろうか。奥井さんがどこで被爆したのかは不明であるが、妹の死を考えると、おそらく近距離被爆ではないかと思われる。描かれた雲が長崎型の形象をしていること、近距離からはきのこ型の雲をみることはできなかったこと、そして、雲の下に妹が横たわっているという絵の構図を考慮すると、原爆の象徴として描かれたきのこ雲であろうと思われる。

NG149-01 を描いた杉浦善蔵さんは、原爆投下の 3 日後に軍命で久留米から広島に入った。つまり、きのこ雲を直接目にしてはいないのである。絵には大きなきのこ雲の下で逃げ惑う人々が小さく描かれている。これも、当日、久留米にいた杉浦さんには目撃することのできなかった情景である。入市後に目にした負傷者の姿と後に知った当日の状況を重ね合わせて絵を描いたのだろうか。添えられた手紙には「数少ない生き証人として、事実を後世に伝える為数年前にこの絵を描いたつもりです」とあるが、絵にあるきのこ雲は、やはり、原爆の象徴であろう。

NG183-40 を描いた山口昭治さんは、赤痢にかかって舟入病院に入院しており、そこで被爆した。幼少期から被爆後までを「昭ちゃんの原子爆弾被爆体験記」という 41 枚の紙芝居に描いている。最後から 2 枚目が NG183-40 である。この絵にあるような形の雲を、舟入から目撃することはできなかったはずである。「一発の原子爆弾により廃墟と化した広島」というキャプションからうかがえるように、実際に見たものではなく、原爆の象徴として描いた雲なのであろう。

以上のように、「新原爆の絵」の方が、県外でみたきのこ雲を描いた絵の割合が高く、県内であっても、世羅や呉市など、遠距離のものが多い。「新原爆の絵」の方が、遠方から目撃したきのこ雲を描いた絵が多いのである。「旧原爆の絵」「新原爆の絵」ともに、きのこ雲の絵が全体に占める割合が高くはないことから、確たることはいえないが、「旧原爆の絵」と比べて、「新原爆の絵」の描き手に遠距離被爆者や入市被爆者、もしくは、被爆者ではない人が多いのではないかと推測

される。ただし、絵で表現している情景が、必ずしも実際に雲を目撃した地点の情景とは合致しない場合もあることから、それぞれの作者の体験を詳細に検討しない限り、厳密に比較することはできない。

広島で見た雲を描いた絵に長崎型のきのこ雲が描かれているのは、長崎型のきのこ雲のイメージが被爆の記憶に占める大きさを示唆する。つまり、集合的記憶として共有されることになったイメージは長崎で米軍が撮影した原子雲なのである。「新原爆の絵」の方が長崎型のきのこ雲が描かれた絵の割合が高いが、「旧原爆の絵」にも長崎型きのこ雲が 2 割を超える絵に描かれていることから、集合的記憶としてのきのこ雲のイメージは、「旧原爆の絵」が描かれた時点においても、確たるものとなっていたことがわかる。それは、実際に目にしていないであろう形をしたきのこ雲を描いた絵が、「旧原爆の絵」でも一定数みられたことからもうかがえる。

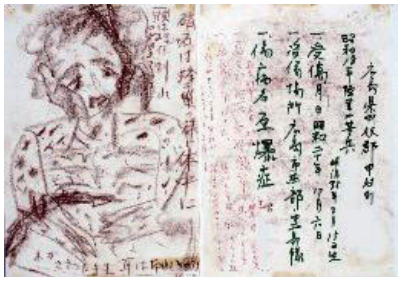
もう一点、きのこ雲の絵の分析から明らかになったのは、法で定義された「被爆者」ではない人も絵の描き手であったということである。特に「新原爆の絵」には、広島県外（山口県熊毛郡周防村、愛媛県松山市、愛媛県温泉郡難波村）で目撃したというきのこ雲の絵が 5 点あり、その作者 3 人のいずれも自身の被爆体験に言及していないことから、いずれの作者も「被爆者」には該当しないと推測される。

### 3　同一作者の作品

原爆被爆から 30 年後に描かれた絵と、それから 30 年近く経った後に描かれた絵との間に、いかなる共通点や相違点があるのか、7 名の作者を取り上げて、それぞれの被爆体験とあわせて検討することにする[8]。

#### 1. 森岡まさ子さん[9]

当時 35 歳だった森岡まさ子（本名・森岡マサヨ）さんは、1975 年 5 月に 1 枚



GE45-32

NG120

[8] 24 人すべての作者の絵の分析を行ったが、紙幅の関係上、7 人に絞って報告する。
[9] 参照資料として、森岡まさ子『煎豆に花が咲いた』朋興社、1984 年、NHK 中国本部『被爆体験　私の訴えたいこと（下）』NHK 中国本部、1977 年、弘前大学教育学部附属中学校『修学旅行記録集』弘前大学教育学部附属中学校、出版年不明。

の絵（GE45-32）を、2002 年 6 月に 1 枚の絵（NG120）を届けている。

新聞記者だった夫・敏之氏と関西にいた森岡さんは、戦争末期、夫の郷里である広島県甲奴郡甲奴町に夫婦で移り住んでいた。被爆当日、夫は基町にある中国軍管区歩兵第一補充隊におり、森岡さんは甲奴の自宅にいて原爆炸裂を目撃したそうである。夫の安否を案じながら待っていると、翌 7 日[10]、甲奴駅の駅長から夫が戻ったと知らされ、駅に急いだ。そこで目にしたのは「お化けの様に変わりはてた」夫の姿であった。それを描いたのが GE45-32 である。頭には木片が突き刺さり、耳は切れ、体中にガラスの破片が突き刺さっている。

夫は甲奴の診療所で応急処置を受けたが、薬不足のため赤チンすらなく、ガーゼとクレゾールを少しもらっただけであった。夫の体に刺さったガラスを抜かないと命にかかわるといわれ、家に帰ってから、森岡さんの手でガラスを抜いたという。このときから「強い女」になったと、森岡さんは振り返る。戦後、原爆症に苦しむ夫を助けたい一心で、矢野温泉に移り住み、その後、夫の希望で県内初のユースホステルを始めることになる。しかし、1968 年、夫の敏之氏は原爆症と肝硬変のため死去する。

90 歳を超えてからも、平和のための証言活動に飛び回っていた森岡さんは、2002 年にも 1 枚の絵（NG120）を届けた。GE45-32 と同様に、瀕死の負傷をおった夫の姿を同じような構図で描いている。ただし、今回は血を表す赤色など、色を使って描いている点に違いがみられる。また、絵の中には、夫の負傷の状態についての説明だけでなく、夫が戦後、ユースをやりながら若者たちにかけていたという言葉（「日本をたのむぞ」「おそろしい原爆も人間がつくったんだ。平和も人間がつくれるはずだ！」）が書かれている。夫の死後、新たにロッジを建て、ユースホステルを経営してきた森岡さんは、原爆の恐ろしさと平和の大切さを国内外で講演するようになった。夫の思いと自身の思いを重ね合わせながら、夫の姿を描いた絵に「平和」への思いを込めたのであろう。

第 2 回募集時にも第 1 回目と同じような絵を描いた要因として、2 つのことが考えられる。自身は被爆していない森岡さんにとって、原爆にかかわる記憶といえば、瀕死の負傷をした夫の姿であったであろうということ、第 2 回募集の前年に資料館から送られていた調査票に、第 1 回募集時の絵の写真が添えられていたために、記憶の呼び水となったであろうということである。

### 2. 原田みどりさん[11]

被爆当時 33 歳だった原田みどり（緑）さんは、1975 年 7 月に 4 枚の絵（GE10-27、GE23-28、GE31-35、GE39-13）を、2002 年 4 月には 2 枚の絵（NG025-01、NG025-02）を届けている。

陸軍看護婦長であった原田さんは、原爆が投下される前日、空襲警報が発令されたため、勤務先の陸軍兵器補給廠で夜を過ごした。翌朝警報解除になった後、

[10] 資料館の実態調査では 8 月中旬とあるが、けがの状態から、翌日であろうと推測される。

[11] 参照資料として、被爆者証言ビデオ（VS00080、1987 年）、広島市教育委員会『あのとき閃光を見た』広島市教育委員会、1986 年。

自宅に帰ろうとした矢先に被爆したが、兵器廠の建物のなかにいたために助かったという。被爆直後、比治山の防空壕に向かっていると、火傷をおい、手を前にぶら下げ、皮膚がボロボロの負傷者たちにあった。看護婦長としての使命感から、防空壕に入ってはいられないと思い、原田さんは兵器廠に引き返した。次から次へと列をなしてくる負傷者の治療に、医者2人、看護師7人という少人数であたったそうである。

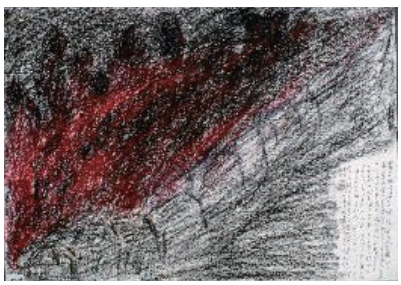
GE39-13には、8月6日の午後、兵器廠の倉庫に収容された負傷者が筵の上で横たわっているところを描いた。千人以上はいたであろうという負傷者を前に、必死で治療にあたるも、手が足りなかった。日が暮れて防空壕に引き返し、翌朝、兵器廠に戻ると、半分ぐらいの人が死んでいたという。絵には、蒼白な顔をした人、口から血を流している人、服が破れて上半身がひどく焼け爛れた人など、瀕死の負傷者が描かれており、満足に治療してあげることのできなかった人たちが苦しむ姿を、30年経った後にも鮮明に記憶していたことを思わせる。

原田さんは「どのウメキ声も、どの顔も特別な人は記憶からぬぐい去ることはできな」かったというが、とりわけ忘れることができない人が3人いたという。その1人がGE23-28にある男の子である。8月7日の午前、2人の大人が、右脛骨部にガラスが深く刺さった5、6歳ぐらいの男の子を運んできた。男の子の両

GE39-13

GE23-28

GE10-27



GE31-35

NG025-01

NG025-02

親は建物疎開に出たまま行方知れずとのことであった。ガラスを取り除かないと化膿して足を切断しなければならなくなるために、手術することになった。しかし、薬品はわずかしかなく、麻酔なしでの手術となった。あまりの痛さに「もう取らなくてもいいよう」と訴える男の子。「取らないと戦争にまけるんだぞ」と励ますも、「戦争に負けてもいいよう」と泣き叫ぶ男の子に「全員目をうるませて手術し」たという[12]。絵の右手後方にいる看護婦は、原田さん自身だろうか。「せめて局所麻酔でもあればいいにと私は我が子に引きくらべて可愛そうで」ならなかったという。手術は成功して無事ガラスを抜くことはできたが、リンゲル液もなく、術後が心配された。なんとかして助けたいと思い、原田さんは隠していた砂糖を助手に取りに行かせて、水で溶いて男の子に飲ませた。砂糖があるとわかったら大騒ぎになると思ったために、「おいしいね」という男の子に「だまってのみんさい」と原田さんは言い聞かせたという。ブドウ糖の代りに砂糖水を飲ませることができて、これでなんとか体力が持つだろうと胸をなでおろしたと、当時を振り返っている。

もう1人忘れることができないのが、GE10-27に描いた老婆である。老婆には娘が4人いたそうだが、「娘が置いて逃げた」と恨めしそうに繰り返していたという。右腕に外傷があり、骨も折れていたので、敗血症を起こすから腕を切らないと命がないと説得したという。やはり麻酔なしでの手術であった。「戦争に勝たなければならないのだからね」と励ますと、痛みに耐えながら「此の手をお国にささげて戦争に勝つことが出来るのなら」と返したという。しかし、すでに玉音放送が流れた後の8月15日の夕刻であった。日本が降伏したことを老婆は知らなかったのである。「手術の後抗性物質（化膿止め）もなく体力だけが命をささえるこの老婆はどうなったでしょう」と絵にあるが、男の子と違って、術後の世話にまで手が回らなかったことから、心残りになっていたのかもしれない。

「気の毒で気の毒で一生忘れられない」と証言ビデオで語っていたのは、死産した母親のことである。被爆の衝撃で出産したが、胎児は胎嚢に入ったまま窒息死していた。待望の男の子を失った母親に「どうか助けてください」と泣きつかれたが、どうすることもできなかったという。自分にも子どもがいるから、かわいそうでならなかった、8月が来るたびに、どうにかして助けてあげたかったと思うと、原田さんは語った。しかし、絵にして届けることはなかった。

第1回募集時に届けた4枚の絵のうち、残りの1枚（GE31-35）は、8月11日の夜に愛宕町方面で見た光景である。街全体を炎が包み込んでいて、そこにいた人たちはみな放心状態であったという。「お母ちゃん火を消さんのね」とどこかの子どもが言うと「どうにもならんよ。こんどは戦争のない国え行こうね。日本人でなくなってもいいよね」と母親は答えたという。「私はこの親子の真実の言葉に深くうたれました。この子供達は不幸な印象を心にきざんで今どうしているでしょうか」と絵にはある。原田さんは看護婦長として多くの瀕死の負傷者を治療したが、一人の母親として、被爆後の子どもや母親の姿は、とりわけ忘れられないものだったのであろう。GE23-28の男の子や、GE31-35の子どもなど、被

[12] ビデオでは、軍医が「坊や、これをとっとかにゃアメリカに負けるんじゃけえ」と励ましたと証言している。

爆した子どもたちの、その後を案じながら当時を思い返して絵を描いたのだろうと想像される。

それに対して、2002年に届けた2枚の絵には、第1回目にはなかった場面が描かれている。NG025-01は兵器廠で遺体を焼く場面、NG025-02は急性症状のために髪が抜け落ちたときの自画像であり、そこに子どもの姿はない。

「旧原爆の絵」は兵器廠での3つの場面を描いたが、すべて負傷者の姿であった。それに対して、NG025-01には、兵器廠の一角で遺体を焼く場面が描かれている。遺族が尋ねてくるかもしれないからという理由で1日待ったが、「ウジ虫が湧き悪臭が甚だしい」ために、8日、兵士たちが廠内の一角に大きな穴を掘り、木材や燃えやすい物を積み重ね、油をかけて遺体を焼いたという。「兵隊さんの中に僧侶の人が居られたので軍服の上に法衣を着てお経をあげて下さいました」とあるように、袈裟を着て読経している男性の姿が絵にはある。残酷な場面ではあるが、死者を弔う気持ちも描き込んでいるのである。「こんな悲惨な状況は絵に残したく」なかったが、「若い世代の人達に原爆を戦争で使えば生物だけでなく地球が死んでしまう事を知ってほしかった」という理由で筆をとったという。「命の尊さを知ってください。いただいて生まれた命を大切にして生きましょう」と絵の中の文章は結ばれている。

もう1枚の絵（NG025-02）は、被爆から1か月後の髪の抜け落ちた原田さんの自画像である。屋内であったとはいえ、直爆を受け、その直後から多数の負傷者の治療にあたり「二次放射能を大量に吸収した」ことからか、9月頃になって体調が悪くなり、毎日高熱がでたそうである。髪が束になって抜けるので不安になっていたところ、眉毛まで抜けおちて丸坊主になり、当時まだ30代半ばだった原田さんは「一生涯外出はできない」と泣いた。父にいわれてセンブリの煎じ汁を毎日つけているうちに、半年ほどしてから産毛が生えてきて、嬉しさにまた泣いたという。「旧原爆の絵」にも「8月も終わりに近づいた時私は大熱を出してたおれました。致死量をはるかに越えた負傷者を次から次と治療して二次性放射能の症状になっていました」（GE23-28）と、自身が病に倒れたことに言及しているが、髪が抜け落ちたとは書いておらず、その姿を絵にすることもなかった。丸坊主になり、抜けた髪の毛をもつ姿の自画像は、長い年月が経ち、人生も終わりに近づいたからこそ描けた絵だったのだろう。

### 3. 山田須磨子（やまだすまこ）さん[13]

被爆当時20歳だった山田須磨子さんは、1974年7月に8枚の絵（GE03-43、GE08-18、GE09-02、GE14-32、GE14-33、GE15-08、GE36-21、GE39-21）を、75年6月に5枚の絵（GE01-48、GE04-21、GE07-48、GE11-38、GE24-20）を、そして2002年6月には4枚の絵（NG125-01、NG125-02、NG125-03、NG125-04）を届けている。

GE09-02は8月6日午前8時ごろ、自宅（五日市町大字皆賀）の外から東の山の方に見えた光景を描いた絵である。GE14-32はGE09-02と同じ場面を描い

[13] 参考資料として、トーマス・C・カートライト著　森重昭訳『爆撃機ロンサムレディー号　被爆死したアメリカ兵』日本放送出版協会、2004年。

たものである。実態調査には「ピカーット光り、見とれるような美しい虹の輪が次々と広がってどんどん近づいて来ました」とある。GE14-33 は、GE09-02 と GE14-32 で描いた場面の直後に目にしたきのこ雲である。

6 日の午後になって、五日市の自宅近くにいろいろなものが空から降ってきたという。GE03-43 には、降ってきたもののうち、灰のつもった木の葉、貯金局の用紙、銀行の用紙、やぶれたフスマらしきものが描かれている。

6 日当日、弟が親戚を探しに市内に入ろうとしたものの、天満町辺りまでしか入ることができなかった。翌 7 日の朝早く、重箱にたくさんの梅干し入りのおむすびを入れて、山田さんと弟は市内に向かい、横川を通って相生橋にたどり着い

GE09-02

GE14-32

GE14-33

GE03-43

GE15-08

GE36-21

GE08-18

GE39-21

た。その道中で目にした情景を、山田さんは何枚もの絵にしている。

GE15-08 は、7 日午前、横川から寺町を通って相生橋まで歩く途中で目撃し「心に残って忘れられずいる」場面だという。白骨となった人、水を求める負傷者、母親の胸に抱かれた乳呑み児、「兄弟・親・子がさゝえて水を呑ませ涼しい場所をもとめている様子」、水を求めて横たわる人に「カケタ入れものをさがし水を運んで看病している人」などが描かれている。絵のなかで特定することはできないが、絵の裏には「3・4 才児が同じ様に 3 人も 4 人も……」とあり、その場には幼児たちもいたようである。

GE36-21 は、日時は不明であるが、己斐から福島町、そして土橋に向かって歩く道中に見たという情景である。電車の中には焼死したと思われる人が描かれてる。線路の脇には牛、馬、犬が描かれているが、「まりの如く」膨れていたという。絵にその表情は描かれていないが、絵の裏には「死してる人々の顔わいつしゅんアッ…と云ふ表状（ママ）でした」とある。その顔を絵にすることはできなかったのだろう。

GE08-18 は、8 月 7 日にみたという、相生橋付近の川べりに斃れた人びとを描いている。西練兵場のそばであり、大勢の兵士が水を求めて倒れていたのだろう。「全部衣類なくスソヨケの所だけ白く肌のまゝで他は赤」かったと説明文にあるように、爆心地近くで被爆して全身に火傷を負い、天を仰いで倒れている兵士たちの姿が描かれている。

GE39-21 も、親戚を探して市内に入った時に目撃した情景である。原爆ドームと護国神社の鳥居が描かれていることから、GE08-18 に描かれた情景の近くで見たものであろう。褌姿で息絶えている人や防火用水に入ってこと切れている兵士たちが描かれている。「生きて地獄を見せられた様子でした。小さい時日曜学校で話され絵を見せられたのを思い出しました」と絵の裏にはある。

山田さんは、これら 8 枚の絵を描いた翌年も 5 枚の絵を描いて届けた。GE01-48 は、後に広く知られることになる、米兵捕虜を描いた絵である。先にみた 4 枚の絵と同じく、親戚を探して市内を歩いた時に目撃した一場面である。8 月 7 日、相生橋電停のガス灯に、両手を釘で打ちつけられ、こめかみを銃で打ちぬかれた 1 人のアメリカ兵がしばられているのを、山田さんと弟は目撃した。あまり血も出ておらず、「キレイな顔をした人」だったという。アメリカ兵は「悲しそうな顔をして」いたと山田さんは記憶しており、「唯可愛想で何も云えず合掌しました。こゝを通る度思い出して忘れません」という。「書いてはいけない絵でわ……と思いつゝ」絵を描いたというが、後述するように、それから数十年経って、描いてよかったと思えるようになるのである。

GE04-21 には、防空頭巾をかぶった、山田さん自身と思われる女性が描かれている。8 月 7 日の午前 10 時ごろ、「歩きつかれて弟と焼けた水道から出る水を呑」んだという場面である。水は生暖かく、ぬるま湯のようで気持ち悪かったが、飲まずにはいられなかったという。一緒に親戚を探して歩いた弟も、その場に一緒にいたはずであるが、絵にその姿はない。弟は 1957 年に若くして亡くなったそうである。「今は亡き弟をしのびつゝ新な涙が流れます」とあるように、弟の姿を絵にする心境にはなれなかったのだろうか。

GE07-48 には、同じころに出会った女性の姿を描いた。着物が破れて肌が露

出しているのを見かねた兵士が「これを腰に着て帰りなさい」と女性に軍服の上着をくれたらしい。それを腰にまきつけた 40 歳ぐらいの女性は、欠けた茶碗にわずかな水を入れて持っていた。火傷をした赤い顔には黒い涙が流れている。「『あんたなんかはケガしてないのに、私だけがこんなにならなくてはならないのよ』……と眞黒い顔をしてにらんだその顔から、大粒の涙がハラハラとあふれ出」たそうである。黒い涙は、女性の心中を表現しているのだろう。顔の火傷を赤で表現しているために、黒い涙が際立っている。山田さんは言葉を失い、ただ女性を見つめるだけだったという。「やけた顔、土も空気も全部焼けるように熱い。さぞ足も痛くあつい事でしたでしょう」とあるように、女性の苦しみを思いながら

GE01-48

GE04-21

GE07-48

GE24-20

GE11-38

NG125-02

NG125-03

NG125-04

NG125-01

山田さんは絵を描いたのであろう。同時に、女性に言われた言葉を記し、その苦しそうな表情を絵にしたことから、女性との遭遇が山田さんのなかで棘となって突き刺さっていることが伝わってくる。

GE24-20も、8月7日朝の絵で、へそが飛び出した乳児を抱く母親を描いている。GE15-08の親子であろう。GE15-08にも、この絵にも、母親が乳児に「添い寝」していたと書いてあることから、同じ場面だと思われる。GE15-08は母子を中心とした絵でありつつも、他の負傷者たちも描いているのに対して、ここでは、白骨のようになった死体を2体、それとわかる程度に小さく描いてはいるが、母子の姿が中心に大きく描かれている。「罪もないおさな児母の添い寝の姿…涙が頬をつたい胸のせまる思いでした」と山田さんは振り返っている。GE15-08を描いた1年後に、改めて母子の姿を絵にしたことから、多くの惨状のなかでも、とりわけこの母子の姿が記憶に焼きついていたと考えられる。

GE11-38は6日の市内の情景であるが、山田さんが直接目撃したものではなく、18歳だった弟の体験を絵にしたものである。原爆投下の当日、親せきを探して市内に入った弟は、天満町と思われるあたりまで進んだが、それ以上中心部に入ることはできなかった。引き返そうとしたとき、倒壊した家屋の下敷きになって出られなくなっていた知人の女性が、弟のズボンにつかまり助けを求めた。なんとかして助けようと、2、3人で木を持ち上げて引っ張ってみたものの、腰から下が埋もれて動かない。火が広がってきたために、女性は「だめですから逃げて下さい」と涙を流した。どうすることもできず、弟は逃げるしかなかった。振り返ったときには、辺りは一面火の海だったそうである。その時のことを語りながら、弟は「叫びごえがいつ迄も耳からはなれません、どうか一緒に心で祈って泣いて下さい」と山田さんに訴えたという。姉に話を聞いてもらって、弟は少し心が安らいだというが、話を聞いた山田さんも「心安らかになりたく」て絵を描いたそうである。弟の話を聞いたのがいつであるのかは不明であるが、弟が1957年に死去していることを考えると、絵を描いた時から少なくとも20年ほど前のことになる。GE07-48の女性との遭遇は山田さん自身の体験であったが、弟の胸につかえた記憶と自身のそれとが絵を描いたときに、ともに想起されたのであろう。絵の中の文章の最後には「合掌」とある。無残な最期を強いられた死者たちが安らかに眠れるようにという願いだけでなく、山田さん自身が記憶の重荷からいくばくかでも解放されるようにという願いが「合掌」という言葉に込められているように思われるのである。

山田さんは、2年越しで13枚もの絵を届けた。そこに描かれている惨状は、必死で忘れようと努めてきた情景であった。2001年10月に返送されてきた実態調査票には「心から忘れたいと思って書いた絵」であったと記されている。絵（GE15-08）の裏に、水を求める人の声が「今も耳に聞こえて来」るとあるように、身体に刻み付けられた記憶に苦しんできたのであろう。痛ましい姿となった大勢の人たちを目撃して、「魂がのりうつったかと思われることもあり、耐えられなく絵に」描いたそうだが、絵にすることで、わずかでも苦しみが軽減されただろうか。調査票には「絵を書いて不安」だったとある。しかし、描いてよかったと思えることもあったという。米兵捕虜の姿を絵にしたことである。

どうしていいかわからず悩んでいたが、アメリカ人が見れば、描かれている「家

族や友人に伝えてほしい」という米兵の思いも通じるのではないかと思って、描くことにしたという。歴史家の森重昭さんが被爆米兵のために慰霊碑をつくり、絵にした捕虜の戦友であったカートライト教授がそこにお参りをしたことを知って、米兵の魂が通じたのだと、うれしく思ったという。そうしたこともあってか、実態調査に回答した翌年届けた4枚の絵には、1枚を除いてすべてアメリカ兵捕虜の姿が描かれている。

NG125-02はGE01-48と同じく、相生橋の電停でみた、両手を釘で打たれ、目の横を銃で打ちぬかれて、悲しそうな顔で死んでいた米兵の姿である。NG125-03も同じ場面であるが、GE01-48とNG125-02に描かれた米兵だけでなく、もう1人が左側に描かれている。NG125-04はNG125-03の左側の米兵の姿である。「旧原爆の絵」で描くことのなかったもう一人の米兵の姿を絵にすることで、山田さんは再び死者を家族や友人という社会関係のなかに返そうとしたのではないだろうか。

広島に出るたびに米兵の姿が目に浮かび、胸につかえた苦しみから逃れたくて、市内に出ることを避けるようになっていったという。しかし、絵を描いて「胸の苦しみが軽くな」ったそうである。戦友だったカートライト教授が慰霊碑に参ったことで、死んだ米兵の思いが通じたと思うことができ、心の安らぎを得ることができたそうである。しかし、あまりにも多くの悲惨な死者を目にした山田さんにとって、記憶の苦しみから解放されることは難しかったのかもしれない。そう思わせるのは、NG125-01の絵である。

NG125-01には、原爆ドームのなかに浮かぶ少女の姿がある。以前、2度ほど少女の姿を目にしたことがあったという。「まだうす煙にかすんだような空気がただようドームに、ふと目をふと向けるとボーッと少女の姿が浮んでもの悲しく淋しそうな姿がこちらをみつめるように浮かんで、物悲しくやるせない思いを」したそうである。絵に添えられた手紙からは、山田さんが少女の苦しみや悲しみに思いを巡らせていたことが伝わってくる。

> さぞ一生懸命家に帰ろうと逃げたこの少女はどんなにかこわく悲しかった事でしょう。炎の中を炎の中を逃げてあの窓の所まで上って行ったのでしょう。方向も分らず、そこからはにげられなくて母のもとへ父母の所に帰りたい会いたいと苦しみの中で涙をし、なきながらお母さんお母さんと叫ぶ思いが写ったのではと思いました。魂が思いが両親のもとへ心でうったえここにいる事を伝えたように見えました。

米兵捕虜と同じく、家族に看取られることも、遺骨が家に帰ることもなかった死者の魂が、成仏することなくさまよっているように感じたのであろう。少女は、山田さんが爆心地近くで目にした死者のひとりだったのだろうか。それとも、どこかほかの場所で横たわっていた少女なのだろうか。ドームが被爆の象徴であることから、死者がそこで自らの存在を訴えてくるように感じられたのだと考えることもできよう。添えられた手紙には、被爆の惨状が「余りにも胸に残り、苦しみとなって忘れられなくなってしま」い、電車に乗ってドームの前を通る時、いつも「言い知れぬ」胸の苦しみを感じ、市内に出るのが嫌になってしまったとあ

る。しかし、目にした惨状を他人に話すことはできず、「ただ自分の心で手を合わせて冥福をお祈りするだけ」だったという。米兵捕虜の場合とは違い、友人や家族が少女を見つけ出してあげることはできないままである。その姿を絵という形にすることで、少女の魂だけでなく、山田さんもいくばくかの心の安らぎを得ることができたことを願わずにはいられない。

4. 中津久子さん

被爆当時 26 歳だった中津久子さんは、第 1 回募集時に 2 枚の絵（GE07-39、GE33-13）を、2002 年には 5 枚の絵（NG210-01、NG210-02、NG210-03、NG210-04、NG210-05）を届けている。

GE07-39

GE33-13

NG210-03

NG210-01

NG210-02

NG210-05

NG210-04

当時、皆実愛児園に勤めていた中津さんは、保育所で被爆し、その後、東方面へ逃げて、主任と一緒に同僚の疎開先である仁保遊園地内の家に一泊させてもらった。翌日の朝、草津町に一人でいる母親のことが心配で、同じ方向に向かう主任と一緒に東から西へと市内を歩いたそうである。その道中で目撃した情景を中津さんは絵にしている。

GE07-39 には 3 つの場面が描かれており、右側には、護国神社鳥居の前に横たわる黒焦げの死体がある。真ん中は、八丁堀交差点近くに呆然とたたずんでいた女性である。いつも己斐駅で出会っていた人で「黒レースドレスの女性」と呼んでいた。左側には富士銀行辺りの防空壕の前に横たわる死体が描かれている。片脚が半焼で白骨になっていたそうである。

もう一枚の絵（GE33-13）には、観音町の土手あたりで横たわる負傷者たちの姿がある。黒いものを持っているのは、電柱のわずかな陰で陽を避けていた女の子である。中津さんが持っていたやかんの音を聞いて、女の子は「お水をちょうだい」と叫んだそうだ。「これ、水ではないのよ。トマトなの」と中津さんが応えると「あ！私のすきなトマト‼」と女の子は嬉しそうに言ったという。仕方なく、やかんの中の青く固い実を 1 つ手渡した中津さんは、女の子をみて驚いた。「いたましい限り、白くただれ眼も鼻も定かならず、唇は白くむくれただれて開きそうにもなかった。さし出した手は両方とも指が一もちにくっつ」いていたからだ。

帽子を顔の上にのせて横たわる男性は、中津さんたちの足音に気づいて「頼みます、たのみます！」と訴えたそうだ。「そのズボンが眞白く、糊付けしたのか眞新しいのか、パリッと陽を反射していたのも、反って、むごくたまらない気持で、私達は逃げるように立去った」そうである。絵のなかでも男性のズボンは真っ白く、しわ一つないように見える。隣の負傷者の姿がなければ、日向ぼっこをしているようにさえ見える。白く際立つズボンと実際の惨状とのコントラストがやりきれなかったという中津さんの思いが、絵からも伝わってくるのである。

中津さんは助けを求めた 2 人に対する申し訳なさを抱いてきた。「先を急ぐ余りとは云え、後になって、なぜ、あのトマトを半分に千切って渡さなかったか、あの子は、どうやってあの手と、あの唇で、あの硬いものの汁を啜ることが出来ただろうかと、悔やまれ、今だに済まないと合掌する」「先を急ぐとは云え、何とか手だてはなかったかと後悔するばかりである」と綴っている。

もっと親身に応えるべきであったという悔いが、中津さんのなかから消えることはなかったようだ。中津さんは、2002 年にも同じ場面を絵（NG210-03）にした。絵には「あの手、あの唇でどうやってトマトの汁を吸っただろう？後悔‼」「帽子の下から、私達の足音きいて「タノミマス。タノミマス」と云う、けれど私達も逃げる途中だった！」とある。

GE33-13 が鮮やかな色彩で描かれているのに対して、NG210-03 は少し暗めで濃い色合いとなっている。トマトを欲しがった女の子も、GE33-13 では負傷の状態が描かれなかったのに対して、NG210-03 では髪は乱れ、衣服はボロボロである。トマトの色が黒ではなく、緑になっているのは、実際のトマトの色を表現しようとしたためだろうか。帽子を顔にのせて横たわる男性も、NG210-03 では、肌の色が変色して、上半身には破れた服を着ている。しかし、白いズボンは NG210-03 でも真っ白く、しわ一つない状態で描かれており、周りの情景や色彩

と対照的な表現となっている。

NG210-01 は GE07-39 の右側に描かれた、護国神社鳥居前の黒焦げ死体を描いたものである。GE07-39 では、目鼻口を描いているのに対して、NG210-01 では、顔も身体も真っ黒く塗られているという違いがみられる。

「新原爆の絵」には「旧原爆の絵」では描かなかった 3 つの情景がある。6 日当日、仁保の遊園地へ逃げる途中で目撃した母子（NG210-02）、大正橋あたりで見た腹のふくれた馬と火傷で赤くなった脚の男性の死体（NG210-04）、日時は定かではないが、比治山国民学校に収容されていた子どもたち（NG210-05）である。NG210-02 は、壊れかけた家の縁側前で母親が「今迄乳呑んどったのに死んだあやあ！」と、乳飲み子を抱いていた場面である。NG210-05 で絵にした子どもたちは、姓名不詳で、ボール紙の番号札がつけてあったという。保育士であった中津さんにとって、とりわけ乳児や幼児の姿は忘れられなかったのだろう。子どものあどけなさが伝わってきて、胸が締めつけられる絵である。

5. 池庄司（久保）トミ子さん [14]

被爆当時 17 歳だった池庄司（久保）トミ子さんは、第 1 回募集時に 4 枚の絵（GE03-04、GE13-12、GE25-12、GE39-39）を、2002 年には 2 枚の絵（NG373-01、NG373-02）を届けている。

看護学校 2 年生だった池庄司さんは、看護師不足のため、日赤病院の小児病棟に勤務していた。8 月 6 日の朝、小児病棟で申し送りを受けた直後、閃光を浴びたという。爆風で飛ばされて、気付いた時には地下室の前で、外来に来ていた小学校 3 年生ぐらいの子と一緒に立っていたという [15]。絵（GE39-39）には、池庄司さん本人と思われる女性が爆風に飛ばされているさまが描かれている。

池庄司さんは顔や胸、手に怪我を負ったが、歩くことはできたため、外来に行ってみることにしたという。玄関広場をはじめ、足の踏み場もないほど、負傷者や重傷者であふれており、「水」「助けて」の声が聞こえたそうである。絵（GE25-12）には、横になったまま手を上に挙げた人、幼子を抱いたモンペ姿の女性の後ろ姿、うなだれるようにして座っている人、背中に大火傷を負った男性、横たわる子どもの姿などが描かれている。

池庄司さんは、水を入れる樋の角を探し出して、水道から僅かに出ている水をついでは、何度も負傷者たちに運んだそうである。絵（GE13-12）には、玄関広場に横たわる大勢の負傷者たちが、池庄司さんらしき女性のモンペをつかんで水を求める姿がある。池庄司さんも怪我をしていたことが、顔と胸に塗られた赤色で表現されている。

もう一枚の絵（GE03-04）には、傷痍軍人たちが、倒壊した南病棟や寄宿舎の下に埋もれた人を助けている姿がある。迫りくる炎を目にして、池庄司さんは一人でも多く助かるように願ったという。絵には、下敷きになった人の「タスケテー」の声が記されている。

---

[14] 参考資料として、被爆者証言ビデオ（VS00303、1992 年）。

[15] GE39-39 の裏には「死亡した見知らぬ子どもをかかえていました」とあるが、証言ビデオでの情報は後の語りとも整合性を持つために、そちらの情報を採用した。

GE25-12

GE13-12

GE03-04

NG373-01

NG373-02

池庄司さんが絵筆をとったのは、同級生を骨髄性急性白血病で失ったことがきっかけだったという。同級生は倒壊した建物の下から救い出され、30 年近く生きてきたが、治療のかいなく亡くなったそうである。友人の死を前に、当時を想起して「いそいで画と云うものを書て見」たのである。

「新原爆の絵」では、「この五十余年間、一時も忘れた事」がないという、1 人の子どもの死を絵にした。原爆投下の翌日、排泄の場所を探して、友人と見つけた民家跡の台所の流しに行った時、子どもの人骨を見つけたという。絵に添えられた手紙には「この人骨を見た衝撃は不思議、骨より可愛い子供の顔になっているのです。小学一〜二年生ぐらいにおもえました。傷のない苦しみのない顔、どうして、こんな子供がここで…涙も出ませんでした」とある。

その後､池庄司さんは郷里に帰って療養した。11 月に招集されて帰院したとき、子どもの人骨があった辺りに友人と一緒に行ってみると、何も残っていなかったという。身内に引き取られたのだろうと、池庄司さんは胸をなでおろした。子どもの骨を発見した場所の近くに小さな草の芽を発見し、命の息吹を感じて、ホッとしたそうである。

NG373-01 は、最初に見たという、がれきに埋もれていた子どもの頭部と手の骨の絵である。「天使（子供）の死」という題だが、一見、なぜ「天使」なのか不明である。しかし、よく見ると、がれきから出ている骨と化した手は、細く小

さく描かれており、それが幼子であったことが伝わってくる。そして、NG373-02 を見ることで、「天使」の意味がはっきりと浮かび上がってくるのである。

NG373-02 には、目を閉じた子どもの顔と手が描かれている。その顔は青白いが、眠っているようにみえる。小さな人骨を目にした瞬間に見えた気がしたという、子どもの姿である。絵の右側には、鮮やかな緑の芽が描かれている。それは命の象徴であると同時に、魂は生きているという意味も込められているのだろう[16]。池庄司さんは、「罪のない子供の冥福を祈」りながら、絵の中で小さな命をよみがえらせたのである。

6. 高原良雄さん[17]

被爆当時 34 歳だった高原良雄さんは、第 1 回募集時に 21 枚の絵（GE07-01-1、GE07-01-2、GE07-10、GE10-03、GE15-31、GE15-32、GE15-33、GE42-07、GE42-32、GE42-33、GE42-34-1、GE42-34-2、GE42-35、GE42-36-1、GE42-36-2、GE42-37、GE42-38、GE46-08、GE46-09、GE46-10、GE46-11）を、2002 年には 5 枚の絵（NG415-01、NG415-02、NG415-03、NG415-04、NG415-05）を届けている。他に 6 枚の絵を原爆資料館に寄贈している。

当時、陸軍衛生兵上等兵として第二陸軍病院に勤務していた高原さんは、8 月 6 日の朝、同僚 2 人と病院娯楽室辺りを巡視しているときに被爆した。娯楽室の下敷きになっていたが、高原さんは、なんとか外に這い出ることができた。石垣の影にいたせいか、大きな怪我はしていなかった。周りでは助けを求める人々の声がしたが、一人では大きな柱や瓦礫をどうすることもできず「すまないと思いながらも」川上へ逃げたという。

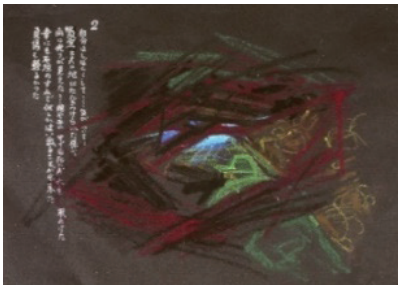
途中で頭から血を流している知り合いの女性に出会い、2 人で一緒に三篠橋付近まで避難した。川の水際を歩いていくと、そこは死者と負傷者の山だったという。水源地まで行った後は、大八車を借りて重傷者を戸坂国民学校に運び、夕方になって戸坂の自宅にたどり着いた。その後、高熱を出して寝ついたが、家族の看護のおかげで 1 か月後には原隊へ帰ることができた。しかし、高原さんが助けた人たちは、みな亡くなっていたという。

21 枚の「旧原爆の絵」には、時系列にそって高橋さんの被爆体験や目撃した情景が描かれている。被爆の瞬間（GE07-01-1）、娯楽室の下からはい出る時の状況（GE07-01-2）、瓦礫の下敷きとなった人たちや、あちこちから火が上がっているさま（GE42-32）、頭から血を流している知り合いの縫工の女性の姿（GE42-07）などである。

負傷した女性を励ましながら、助け合って避難したことも記されているが（GE42-07）、やはり、救うことのできなかった同僚のことが、心残りだったのではないだろうか。庶務で勤務する親しい友人たちを助けようとしたが、大きな柱は動かすことができず「涙をのんで去ることにした」という（GE42-33）。助けを求める人の姿は描かれていないが、声は聞こえても実際に姿が見えなかったためだろうか。それとも、その姿を描くに忍びなかったからだろうか。GE42-

16 『私の訴えたいこと』には、「魂は生きているということ」を知った、とある。
17 参考資料として、『あのとき閃光を見た　広島の空に』広島市教育委員会、1986 年。

GE07-01-1

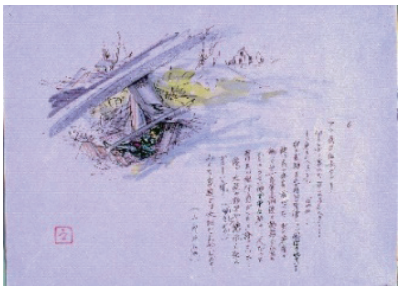


GE07-01-2

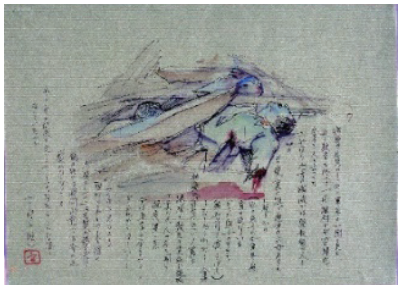
GE42-32

GE42-07

GE42-33



GE42-34-1



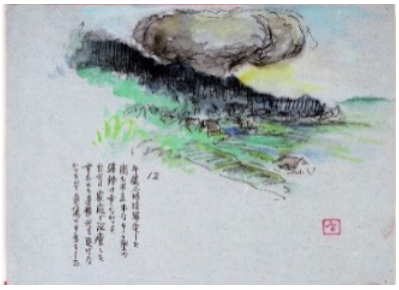
GE42-34-2

GE42-35

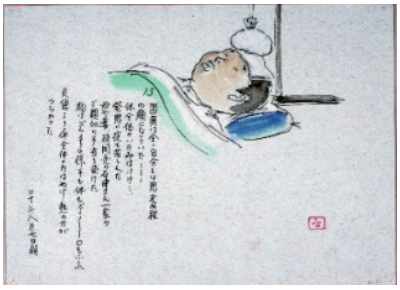
GE42-36-1

GE42-36-2

GE07-10



GE10-03



GE15-32

GE15-31

GE42-37

GE15-33

GE42-38

GE46-08

GE46-09

GE46-10

34-1 には、息絶えていたという原田伍長の姿が描かれているが、軍医の一団の絵（GE42-34-2）に比べると、負傷の状態が詳細に描かれていないことから、知人の変わり果てた姿は絵にできなかったと解釈することもできる。絵には「何んと云う哀れな姿になったんダ」とある。後に死んだらしいと聞いた同僚たちにも言及し「みんな家庭では大切なおやじだのに」と嘆いている。

病院の広場らしいところで、軍医の一団らしき人たちが倒壊した建物の下敷きとなって死んでいるのを目撃した高原さんは、比較的詳細にそのなかの 1 人を描いている（GE42-34-2）。ちぎれた腕から血が流れ、天を仰いで口を開けたままこと切れた姿である。しかし、悲惨な状態を描いただけではなかった。絵には次のようなエピソードが記されている。被爆前夜、軍医の教育を受けている息子に差し入れしようと、地方から出てきたという母親に、息子の好物の鮎寿司を渡してほしいと頼まれた。食べ物の差し入れは禁止されていたのだが、高原さんは、みつからない場所でその母親と落ち合って寿司を受け取り、深夜、息子に渡したという。その人もここにいるのだろうと思いつつも「どうか助かってほしい」と祈るような思いを記している。無残な姿となってしまったが、死者たちも誰かの息子であり、父親であるのだと、絵を通して訴えかけているようである。

三篠橋の袂に着くと、そこには看護婦見習生が集団で避難していた（GE42-35）。泣いて互いに助け合いながらも、呆然としていたという。見習い生たちが肩を抱き合い、顔を手で覆って嘆き、口を開けて呆然としている姿が絵にある。左手前に大きく描かれた女性は、頭から血を流していることから、一緒に連れて逃げた縫工の女性だと思われる。彼女を休ませて、看護婦に後を頼んで高原さんは川上に向かったという。

水際を通りながら、他の負傷者たちとともに、言葉もないまま逃げたという場面が、GE42-36-1 に描かれている。その後、道路に出て、十部隊の兵隊と力を合せて逃げ続けた。GE42-36-2 は、農家の大八車を借り、重傷者を乗せて戸坂国民学校の救護所に向かっているところである。大八車に乗せられた負傷者は、頭や脚から血を流している。道には「丸で石ころの様に」負傷者や死者が横たわっていたというが、絵の中では死者は 1 体だけしか描かれていない。赤子を抱いた母親の横に座っている幼女が高原さんたちを見る表情は、どこかあどけなさを感じさせる。

戸坂国民学校は「オモチャ箱をひっくり返した様な物凄い患者で一ぱい」だったという。絵（GE07-10）には数人の負傷者が治療を受けているところと、嘔吐する負傷者の姿がある。「焼けたゞれ!!」「出血!!」などと書かれているが、絵では表現されていない。

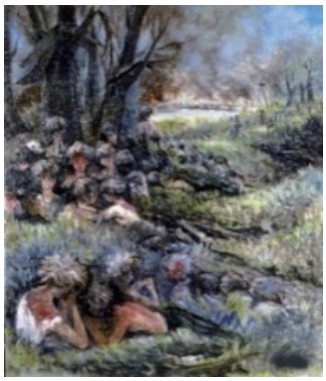
救護所を後にした高原さんは、午後 2 時ごろに戸坂の自宅に帰り着いた。まだ「不気味なきのこ型の爆煙」が空に立ち込めていたという（GE10-03）。高原さんは直接閃光を浴びなかったというが、翌朝には顔が「ゴムまりの様」に腫れあがり、手や身体、口も膨れて、全身の痛みと発熱に苦しんだ。腫れ上がった顔をした高原さんが床に就いている様子が、GE15-32 に描かれている。

8 日の朝、家族が止めるのも聞かずに、高原さんは本院に帰ることにした。途中、木をひろって杖にして歩いていると、友人と遭遇した。名札がなかったら、その人とわからなかったであろうというほど、変わり果てた姿となっていたそうだ。

友人によると、朝礼の時に全員やられたという。戸坂国民学校に行って手当してもらうように言って、高原さんは友人と別れた。前日救護所に運んだ十部隊の兵士は、3人とも死んでいたそうである。絵（GE15-31）には「風船人形の様に一様にふくれ丁度ジャガイモの様な色をしていた」兵士の姿が描かれている。

本院の近くに行くと、自由行動でいいといわれたために、再び自宅に帰って療養し、1日も早く回復して復帰することにしたという。薩摩芋農工班として市外地に行っていた部隊が残がい整理していたが（GE42-37)、1か月ほどして死んでいったという。

1か月余り養生したのち、高原さんは何とか動けるようになって、原隊に復帰した。高原さんは軽傷ですんだというが、他の兵士たちは火傷の跡が「背に水袋を背おった様」に膨らみ、手足の至るところが化膿して「みな死んで行った」という。絵には、髪が抜けたり、背中に大きな水ぶくれができている人、歯茎や手の指の間から血が出ている姿が描かれている（GE15-33)。



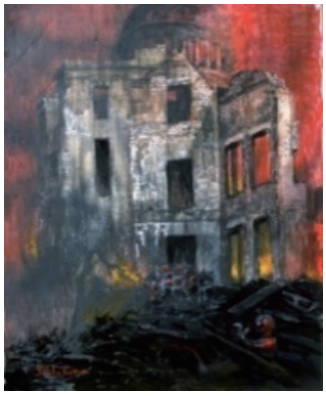
GE46-11

NG415-01

NG415-02

NG415-03

NG415-04



NG415-05

戸坂国民学校の校庭では毎日「今日は一三五名、今日は九八名」というように、次々と負傷者が亡くなり「死人の山」ができていたという。木を積み上げて、その上に「死人の山」を載せ、またその上に木片などを積んで焼いている情景を絵（GE42-38）にしている。絵に添えられた文章には、「どうしてこんな無情なことが在っていゝものか。まだ多くの戦争犠牲者の出る事を止めるための犠牲になった広島市民はなぜその責を負はされたか…。自分は今こうして描いていても胸がこみ上げ涙する」とある。

高原さんは、時系列に沿って 17 枚の水彩画を描いたが、他に 4 枚の油絵を描いている。原爆の 2 日後に見た産業奨励館前の状況（GE46-08）、敗戦の翌春、相生橋付近からみた原爆ドーム（GE46-09）、昭和 21 年の秋ごろの広島城焼跡（GE46-10）、そして原爆投下当日の看護婦教育中の女学生たちの姿（GE46-11）である。GE46-11 は GE42-35 と同じ場面であるが、GE42-35 に比べると肌や髪をより写実的に描いており、惨状がより生々しく表現されている。

高原さんは 2002 年にも 5 枚の油絵を描いており、それぞれの絵を説明する文章を添えている。NG415-01 には、今の平和公園近くで建物疎開をしていた中学生たちが、火傷を負って川に倒れこんでいる姿が描かれている。「死んだ者は川に流された」とあるように、川に浮かぶ死体も数体描かれている。中学生たちはみな裸で、血を流しているのか、火傷のためか、赤色が塗ってある。背後には倒壊した家屋や各所で燃え上がる炎、木の枝に引っかかって死んでいる人の姿もある。

NG415-02 は GE42-07 と同じ場面を描いたものであろう。広島第一陸軍病院は倒壊し、周りから炎が迫っている。「勤務員が家の下敷になり頭その他を負傷しているのを見た。何とか安全な場所へと誘導して行きました」とあるが、GE42-07 では「向うから女の負傷者らしい人が来た」とあるので、その女性が同一人物であるかどうか断言はできないが、おそらく同じ場面を描いたものと思われる。GE42-07 に比べて、NG415-02 は赤色が多く塗られており、女性の頭や顔辺りの怪我のひどさが強調されている。

NG415-03 には説明文がないが、GE42-36-1 と同じ場面だと思われる。GE42-36-1 には赤色はなく、負傷の状態が詳しく表現されていないのに比べて、NG415-03 では負傷者に赤色が塗られている。衣服が破れていたり、火傷の手を前に垂らしている状態なども詳細に表現されている。また、川に横たわる死体も、より詳しく描写されている。

NG415-04 は「旧原爆の絵」にはない、相生橋付近の情景の絵である。燃えさかる炎のなかに、黒焦げになった市内電車と、電車の中で黒焦げとなった人たちの姿がある。「正に地獄の有様でした」という言葉を絵に表現したものといえよう。「全市全滅して家も瓦もふっとんで町中をさまよい病院本部に報告することも出来ず、町をうろついていました」と説明している。しかし、「旧原爆の絵」によると、基町の第二陸軍病院から川沿いに三篠橋のたもとにたどり着き、その後戸坂に向かったということになっている。体験記にも相生橋付近のことは書かれておらず、陸軍病院から「火災をよけて川上へ逃げた」とある。「旧原爆の絵」や体験記に書かれた高原さんの避難経路から考えると、炎が燃え広がるなか、陸軍病院から相生橋の方に向かったと考えるのは、少し不自然に思われる。

NG415-05 には、原爆ドームと、その手前で倒壊した家屋の下敷きとなった人たち、大けがをして血を流す母親が赤子を抱き上げた姿がある。説明文には「ある女性が我子と共に下敷になり赤ん坊をささげて『どうかこの子を助けて下さい』と叫んで通り合せる人に助けてもらっていた」とあり、その現場を目撃したように書かれている。しかし、前述のように、高原さんがその場にいたとは考えづらいため、自身が目撃した場面なのか、あるいは誰かから聞いた話なのか、定かではない。「旧原爆の絵」には、原爆被爆の 2 日後に産業奨励館付近に行ったとあるが、そこは陸軍病院本院の近くであることからも、記憶違いではないと思われる。その時に目にした産業奨励館、後に知った相生橋付近の原爆投下直後の状況や他の被爆者が描いた絵などが、高原さん自身の記憶と交じり合った結果、描かれた絵ではないかと推測されるが、高原さん自身に確かめることは、もはやかなわない。

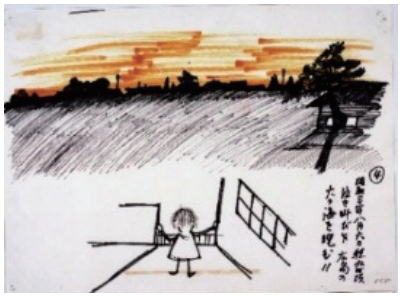
7. 杉本知佐子さん

被爆当時 11 歳だった杉本知佐子さんは、第 1 回募集時に 4 枚の絵（GE08-43、GE23-46、GE32-02、GE36-01）を、2002 年には 2 枚の絵（NG428-01、NG428-02）を届けている。

GE36-01

GE32-02

GE23-46



GE08-43

NG428-01

NG428-02

杉本さんは弟と一緒に祖父母の家に疎開していたが、母恋しさに弟と 2 人で広島に帰ってきた。8 月 6 日の朝、杉本さんは、幟町の自宅で母、姉、弟とともに被爆する。杉本さんと姉、そして母親は外に出ることができたが、6 歳の弟は家の下敷きとなり、助け出そうにもかなわなかった。母親は「燃える家の中の倒れた大きいハリにしがみついて、私も一緒に死ぬと泣き、叫んだ」が、17 歳の姉が叫びながら、母親の「腕を指を」「1 本 1 本、離し」て、3 人は燃える家を後にしたという。

逃げる途中、杉本さんらは、1 人で泣いている小さな男の子に出会った。その姿が弟と重なったためか、杉本さんは一緒に行こうと誘ったが、その子は「いやいや」をして八丁堀の方へ行ってしまったそうである。「旧原爆の絵」でも「新原爆の絵」でも、この場面が描かれている。男の子は「真っ黒だった」という通り、2 枚とも真っ黒く塗られている。GE36-01 は色を使って炎を表現したり、倒れた電柱や瓦礫を描いているのに対して、NG428-01 は墨を使って描いており、より抽象的表現ではあるが、男の子が涙を流しているようにも見える。

杉本さん親子は京橋を渡り、夕方、旧安佐郡口田村から川内村に舟で渡ったそうである。橋を渡るときの様子（GE23-46）と舟で川を渡るときの様子（GE23-46）が描かれている。GE23-46 で橋を渡る小さな女の子は、杉本さん自身の姿であろう。「余りの熱さに、渡れなくて、母の呼び声に我を忘れて一生懸命渡」ったとあるように、橋が燃えるなかを必死で渡ろうとしている小さな女の子の姿と、向こう岸から必死で叫んでいる母親らしき姿が絵のなかにある。GE23-46 には、杉本さん親子が舟の先端に座っている姿が描かれている。手前の船頭が大きく白で表現されているのに対して、杉本さんたちは小さく黒く塗られている。実際に顔も身体も煤で黒くなっていたようではあるが、「無言で」「放心状態」となっていたことを表現しているのだろう。

家の前につくと、母親は倒れこみ「坊やが死んだ坊やが」と泣き叫び、杉本さんは母親に「すがるだけ、泣くだけ」だったという。実態調査票には「書きながら涙があふれます」とある。GE08-43 には、6 日の夕方、たどり着いた祖母宅から広島方面を眺める杉本さんらしき少女の後ろ姿がある。絵に「泣き叫び乍、広島の火の海を睨む」とあるように、少女の視線の先には赤い空がみえる。

2002 年に送った 2 枚の絵のうち、1 枚（NG428-02）は、弟が炎に飲み込まれたところを表現している。「旧原爆の絵」では描かなかった場面である。倒壊した家屋らしいものが墨で描かれているが、赤いマジックは炎を表現しているのだろうか。説明文には「つぶれた家から抜け出すと松の木に火の気もないのに熱線で火がついて燃え出していた。弟を助けようとしたがだめだった」とある。絵のなかに弟の姿はない。杉本さんは 6 枚の絵を残したが、弟の姿を描くことはなかった。

## Ⅳ．考察

以上の結果を受けて、新旧「原爆の絵」の比較を通して明らかとなった、被爆の記憶の在り方について、検討してみたい。

描かれた対象や場面の同異でいうと、「きのこ雲」と「熱線」を描いた絵の出

現頻度は新旧「原爆の絵」である程度の違いがみられるが、両者ともに「旧原爆の絵」「新原爆の絵」全体に占める割合からいえば低い。他方で、「旧原爆の絵」「新原爆の絵」ともに、負傷者や死体の絵が多数を占めている。描かれた場面や対象が一番記憶に残っているものであるとは限らないが、やはり、死者や瀕死の負傷者の姿が、被爆の記憶において核となっているといえるだろう。描かれた場面や対象の分析からは「旧原爆の絵」と「新原爆の絵」の間に大きな違いがあるとはいえないが、同じ対象であったとしても、どのように描かれているかという点においては、違いが浮かび上がってきた。

女学生を描いた絵において、火傷の状態を生々しく描いたものの割合が、「新原爆の絵」の方が若干高い傾向にあることがわかった。ただし、大きな違いではない。新旧どちらの絵も、惨状をリアルに描写した絵は少数にとどまっているからである。絵にした女学生に向ける作者の思いについても、「旧原爆の絵」と「新原爆の絵」の間で大きな違いは認められなかった。「原爆の絵」に限らず、原爆体験の証言全体にいえることだが、家族や知人、友人に対してだけでなく、偶然目にした瀕死の負傷者や死者に対しても、慰霊の気持ちを表現したものは多い。そして、死者を悼む気持ちは、年月の経過とともに薄れているわけではないことが、新旧「原爆の絵」の比較からみてとれる。「新原爆の絵」でも、死者に対する慰霊の気持ちを「合掌」という言葉で表したものが複数みられたし、負傷の状態をカラーで生々しく描くという、ある種のむごさを伴っている絵にも、絵にした女学生を思う気持ちが込められているものが少なくなかった。

火傷の描写に関しては、「旧原爆の絵」に比べて「新原爆の絵」の方が、より写実的に描いている絵の割合が高かった。女学生の絵のように、それぞれの絵に添えられた文章や手紙から読み取れる、描かれた負傷者・死者への思いについては、分析に含めなかったために、描かれた対象との心的距離が広がったことにより、火傷の酷さをより写実的に表現できるようになったかどうかを判断することはできない。今後の課題としたい。

きのこ雲の描写については、「新原爆の絵」の方が、きのこ雲が描かれた絵の割合が高く、遠距離から目撃した雲を描いた絵が多い。全体として「新原爆の絵」の方が「旧原爆の絵」よりも、遠距離被爆者や被爆者ではない描き手が増えたために、こうした違いが生じたと考えられる。「新原爆の絵」の方が長崎型のきのこ雲の絵の割合が高いのは、「旧原爆の絵」に比べて、作者の年齢が低いという点が要因の 1 つとして考えられる。幼少期の体験の記憶はおぼろげなものになりがちで、家族をはじめとする社会集団が形成する記憶に縁どられることが多い。絵にある雲は、作者が実際にみた雲ではなく、成長するなかで何度も目にすることで自らの記憶に取り込むことになった、イメージとしてのきのこ雲を表したものなのではないだろうか。

被爆の記憶において、きのこ雲が被爆の象徴としての地位を獲得したのは、原爆投下後すぐではない。被爆から 10 年ほどの間に書かれた原爆体験記のなかで、爆心地からの距離に言及して自らの体験を振り返るものが少数にとどまっていたように、きのこ雲に言及するものは少なかった。しかし、「旧原爆の絵」が描かれた 1970 年代半ばまでには、被爆の象徴となっていたことがわかる。それは、「旧原爆の絵」に、実際に見えたはずのないきのこ形の雲、特に長崎型のそれがみら

れることからもわかる。

きのこ雲のイメージは、アメリカ発で国際的に形成されてきた原爆の集合的記憶の1つの形である。1945年8月20日発行の雑誌『ライフ』には、米空軍が上空から撮影した広島と長崎のきのこ雲の写真が掲載され、それが他のメディアに転載されて国際的に広く流通した。また、広島、長崎のきのこ雲だけでなく、1940年代後半から行われた原爆実験において発生したきのこ雲の写真は、日本を含む非核保有国でも広く報道され、映画や漫画、イラストなどに取り入れられて、冷戦期の代表的な文化イメージの1つとなった。どのような経緯で、広島ではなく長崎型のきのこ雲の形象が原爆の象徴（記憶の集合表象）となっていったのかについては、さらなる歴史研究を要するが、今回の分析で、きのこ雲のイメージが、集合的記憶として被爆者自身の記憶に影響を与えていることが示唆された。

次に、2度にわたって絵を届けた作者の被爆体験と絵について、その共通点や相違点などを踏まえて、被爆の記憶との関連を考えてみたい。24人の作者のなかには、「旧原爆の絵」と「新原爆の絵」で同じ場面のみを描いた人、同じ場面に加えて別の場面を「新原爆の絵」に加えた人、「旧原爆の絵」で描いたいくつかの場面の一部のみを「新原爆の絵」で描いた人、新旧で全く違う場面を描いた人がいる。同じ場面を描いた作者のうち、森岡さんの場合は、新旧ともに被爆した夫の姿を描いた。自身が被爆しておらず、原爆の記憶といえば、瀕死の負傷をした夫の姿であったことが、夫の絵を描かせた要因だと考えられる。同時に、夫の負傷は、森岡さんが「強い女になった」と振り返るように、森岡さんの自分史において大きな転換をもたらす出来事でもあった。さらに、第2回目の絵の募集の前年に資料館から送られていた追跡調査には、「旧原爆の絵」の写真が添えられていたことから、それが記憶の呼び水となって「新原爆の絵」に影響したとも考えられる。森岡さんに限らず、資料館の追跡調査が「新原爆の絵」に影響を与えた可能性は否定できない。同じ構図で、もしくは、別のアングルから、あるいは、ズームアップして同じ場面を描いている作者が何人もいるからである。

森岡さんの他に、原爆体験の核となった場面や情景を2度にわたって描いた例として、中津さんの絵がある。同じ場面を2度にわたって描いたのは、助けを求められながらも応じることができなかったと悔やむ気持ちが、60年近い年月の経過にもかかわらず、薄れることがなかったからだろう。あるいは、悔いが残り続けたことで、記憶が持続したともいえるだろう。

心の棘となって残り続けた記憶を2度にわたって描いた絵がある一方で、記憶の重荷が軽くなったからこそ、同じ場面が描けたと思われる絵がある。山田さんの描いた米軍捕虜の絵である。死者の記憶に苦しんできた山田さんは、「旧原爆の絵」で目撃した惨状を何枚もの絵にした。それに対して「新原爆の絵」は、1枚を除いてすべて米兵捕虜の絵となっている。描いてもよかったのだろうかと思い悩んだこともあったそうだが、絵にした米兵が、戦友に ── 死後ではあっても ── 見つけ出してもらうことができたと知り、その手がかりとなった絵を描いてよかったと思えたのである。だからこそ、「旧原爆の絵」で描いた米兵と、その時には絵にしなかったもう1人の姿を「新原爆の絵」で改めて描いたのであろう。

絵の表現に着目してみると、同じ場面を「新原爆の絵」ではより詳細に、あるいは惨状をより写実的に描いた絵の方が、そうでない絵よりも多いことがわかっ

た。「新原爆の絵」にある負傷者の姿の方が、「旧原爆の絵」よりも柔らかい表現となっているのは、1人のみである。これは、女学生や火傷の描写で得た結果と共通するものである。同時に、悲惨さを強調する絵画表現に変化したものであっても、描いた対象に手向ける思いが薄れたわけではないこともわかった。これも、女学生の絵でみた結果と共通する点である。

新旧「原爆の絵」で違う場面を描いた作者たちも、「旧原爆の絵」では描かなかった惨い場面を描いたり、「新原爆の絵」では血の色を塗ったり、負傷者や死体をより大きく、あるいは詳細に描いている。しかし、死者を悼む気持ちが薄れたからではない。たとえば、原田さんは、「旧原爆の絵」では絵にすることのなかった火葬の場面を「新原爆の絵」に描いた。本当は絵に残したくなかったが、次の世代に原爆の恐ろしさを知ってほしいという思いから、描くことにしたという。しかし、それだけではないだろう。絵の中にお経を唱える男性の姿があるように、惨い死を強いられた死者たちを慰霊する気持ちも、絵には込められているからである。

死者を悼む気持ちが表現された絵のなかには、池庄司さんや山田さんの絵のように、現実ではなく作者の心的情景を描いたものもある。とりわけ、山田さんが描いた原爆ドームのなかの少女の絵からは、個人の記憶と集合的記憶との結びつきをみることができる。山田さんは、原爆ドームのなかに被爆死した少女を2度ほど目撃したと振り返っている。本当に見えたのかもしれないが、代表的な被爆のシンボル ── あるいは、被爆の一般化されたイメージ（集合的記憶） ── であるドームの中に、山田さんが実際に目撃した死んだ子どもたちの象徴として、少女が浮かび上がってきたとも考えられる。ここに、集合的記憶と個人の感情記憶との融合を見ることができよう。同じことは、高原さんの原爆ドーム前の母子の絵にもいえるだろう。絵のなかで、集合的記憶としてのドームのイメージと、母子を悼む高原さんの感情記憶が融合していると解釈することができるのである。

池庄司さん、山田さんや高原さんの絵のように、「原爆の絵」は、見たままを描写したものでは必ずしもない。作者が死者や瀕死の負傷者に手向ける思いが、絵には込められているからだ。絵の中の負傷者に「血の色を塗らない」という選択をしたり、負傷の状態を抽象的に表現した絵があるのは、死者に対する慰霊の思いがあるからである。池庄司さんや山田さんの絵のように、実際に起こったわけではない心的現実を描いた絵にも、死者に手向ける思いが込められている。

実際に見たわけではない情景を描いた絵のなかには、弟の記憶を描いた山田さんの絵のように、他者の記憶を描いたものもある。本稿では分析対象としなかった絵のなかにも、子どもが母親の話をもとに、あるいは孫が祖父の話をもとに描いた絵がある。ほかに、幼少期に被爆した作者が写真を参照しながら描いた絵や、絵の上手な被爆者が他の被爆者の話を聞きながら描いた絵もある。さらに、「原爆の絵」の描き手が被爆者だけではないことも明らかになった。例えば、被爆した夫の姿を描いた森岡さんやきのこ雲を描いた県外の作者たちである。描かれた場面が作者の原爆体験であるとは限らないし、作者が被爆者であるとも限らないのである。つまり、すべての「原爆の絵」について、被爆者の脳裏に焼きついた記憶を表したものである、とは言い切れないのだ。

トラウマ記憶という観点から検討しておきたいのが、「新原爆の絵」の方が「旧

原爆の絵」に比べて、負傷者や死体の傷を、色を使って、より生々しく、あるいは焦点化して描いた絵が多いという点である。たしかに、新旧「原爆の絵」ともに、全体として、脳裏に刻み込まれた惨状を描き出しており、長い年月を経てもなお鮮明な被爆の記憶の性質を伝えている。しかし、トラウマ記憶の性質ゆえに、負傷や死体の状態を生々しく描いているとはいえない。ひとつには、フラッシュバックのように、絵が記憶を反映していると解釈するには無理があるからだ。トラウマ記憶に主導権を握られていたのでは、記憶を絵にすることはできない。絵を描くという選択をするには、記憶に挑む主体的関与が求められるのだ。だからこそ、死者を思う気持ちから、あえて生々しく描かないという選択をした作者もいるのである[18]。さらに、杉山さんの例が示すように、激しいトラウマとなった場面であるならば、なおさら抽象的にしか描けなかったり、絵にすることができなかったのではないだろうか。少なくとも、「新原爆の絵」が「旧原爆の絵」に比べて生々しい描写となっている理由を、トラウマ記憶の持続という観点から説明することはできない。

他に考えられる要因として、集合的記憶が絵画表現に与える影響を取り上げたい。きのこ雲の表象分析からは、きのこ雲という一般化された被爆のイメージ（集合的記憶）によって、個々の作者の絵画表現や記憶の在り方が影響を受けていることが示唆された。負傷者や死体の描写についても、同じことがいえるのではないだろうか。たとえば、逆立った髪、焼け爛れ垂れさがった皮膚など、多くの絵に共通する表象がある。それは、実際に個々の被爆者が目撃した負傷者や死者の姿であっただろう。同時に、そうした個々の記憶が、繰り返し様々な媒体で表現されることで、一般化されていったイメージや視覚表象でもある[19]。絵で表現されているのは、それぞれの作者の記憶であると同時に、個々の記憶が融合してできた集合的記憶なのである。翻って、個人が想起する光景は、一般化されたイメージの影響下で想起されたものだともいえるのだ[20]。つまり、原爆体験はそれぞれの作者に固有のものであったとしても、その記憶や記憶の表象は、集合的な枠組みやイメージに少なからず影響を受けているのである。

「新原爆の絵」における負傷の描写が写実的であるように感じられるのは、個々の作者の記憶が鮮明だからというよりも、60 年近い月日によって記憶が少なからず薄れたことで、原爆被害の表象の型が、より強く作者の絵画表現に反映された結果なのかもしれない。分析の際に用いた指標が、カラーであるか否かというものを除いて、火傷の典型的な表象の有無であったことを踏まえるならば、あり得る仮説だろうか。絵画表現の分析をより詳細に行い、一般化された表象の型が「原爆の絵」にどのように出現しているかを特定することで、仮説を検討することができるだろう。今後の課題としたい。

---

18 作者の想いについては、拙著『「原爆の絵」と出会う ── 込められた想いに耳を澄まして』（岩波ブックレット、2004 年）を参照されたい。

19 リニューアル前の原爆資料館本館で展示されていた被爆再現人形を思い起こされたい。

20 たとえば、高原さんが学徒らを描いた絵（NG415-01）は、映画『ひろしま』（1952 年）にある 1 シーンを思わせる。『ひろしま』が被爆の記憶に与えた影響について、西本雅実さんにご教示いただいた。

原爆体験の記憶は、体験者に固有のものであるがゆえに、他者と共有することは不可能だといわれてきた。しかし、筆者がこれまで明らかにしてきたように、被爆体験／原爆体験の記憶は、戦後日本のなかで形成されていったものであり、その意味において、被爆者ではない者を含む社会の産物だといえる[21]。きのこ雲の分析では、実際に見たわけではない雲のイメージが、記憶の枠組みとして体験者自身の記憶 ── 少なくともその絵画表現 ── に影響を与えていることがわかった。きのこ雲だけではない。記憶の枠組みとなったイメージは、きのこ雲や同心円の地図がその典型であるように、体験者が出来事のただ中で手にしていたものではなく、後に形成されていったものなのである。

たしかに、体験それ自体は体験者に固有のものであるし、死者や負傷者の記憶に苦しむことになったのも、その場に居合わせたがゆえのことである。しかし、被爆者が過酷な記憶を絵に表現することができたのは、被爆の記憶の絵画的表現を求める社会的な要請があったからであり、被爆の記憶が社会で共有されてきたからこそでもあるのである。

[21] 前掲、拙著（2015 年）を参照されたい。